

# 堅粕 4

— 堅粕遺跡群第9次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第626集

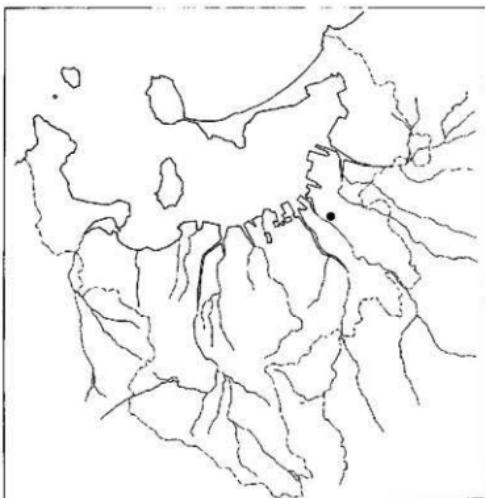
2000

福岡市教育委員会

# 堅粕 4

—堅粕遺跡群第9次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第626集



遺跡略号 KKS-9

遺跡調査番号 9775

2000

福岡市教育委員会

## 序

現在、アジアに開かれた国際都市を目指し、街づくりを進めている福岡市は、古来アジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る遺跡の保護、活用に努めており、開発により失われていく遺跡については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、市営住宅建設に伴う堅粕遺跡第9次発掘調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世に至る集落跡が検出され、当時の生活を知る上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで建築局住宅計画課の関係者及び地元の方々には多大なご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表すと共に、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 西憲一郎

## 例　　言

1. 本書は福岡市博多区吉塚1丁目8における市営住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成10(1998)年3月12日から7月17日にかけて発掘調査を実施した堅粕遺跡第9次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、ピットはSP、土壙はSK、井戸はSE、溝・河川はSDとし、一括して通し番号を付した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は担当の井上繩子、佐藤一郎の他、伊藤美伸、兼田ミヤ子、桑原美津子、高手與志子、野口リュウ子、吹春憲治が、写真撮影、製図は井上が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測・写真撮影・製図は井上が行った。
5. 本書の執筆・編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	9775		遺跡略号	KKS-9	
調査地地番	福岡市博多区吉塚1丁目8				
開発面積	3,893m <sup>2</sup>	対象面積	3,893m <sup>2</sup>	調査面積	1,973m <sup>2</sup>
調査期間	1998年3月12日～7月17日			分布地図番号	35-0122

## 本文目次

I.はじめに .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査体制 .....	1
II. 遺跡の立地と環境 .....	2
1. 遺跡の立地と周辺の遺跡 .....	2
2. これまでの堅柏遺跡群の調査 .....	5
III. 調査の記録 .....	8
1. 調査概要 .....	8
(1) 調査経過 .....	8
(2) 調査区の土層 .....	8
2. 遺構と遺物 .....	9
(1) 包含層出土遺物 .....	9
(2) 検出遺構 .....	13
① ピット .....	13
② 土 壤 .....	13
③ 井 戸 .....	18
④ 溝・河川 .....	19
(3) 遺構出土の遺物 .....	21
① ピット出土遺物 .....	21
② 土壤出土遺物 .....	21
③ 井戸出土遺物 .....	28
④ 溝・河川出土遺物 .....	28
(4) 捣乱出土遺物 .....	29
3. 小 結 .....	31

## 挿図目次

第1図 堅船遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）	4
第2図 堅船遺跡群と第9次調査地点の位置図（1/4,000）	6
第3図 調査区位置図（1/500）	7
第4図 調査区造構配置図（1/200）	折り込み
第5図 包含層出土遺物実測図1（1/3）	10
第6図 包含層出土遺物実測図2（1/3、1/2、2/3）	11
第7図 造構実測図1（1/40）	14
第8図 造構実測図2（1/40、1/20）	15
第9図 造構実測図3（1/40）	16
第10図 造構実測図4（1/40、1/20、1/10）	17
第11図 SD343、SD411断面図（1/40）	19
第12図 SD343、SD411造構配置図（1/200）	20
第13図 造構出土遺物実測図1（1/3）	22
第14図 造構出土遺物実測図2（1/3、1/2）	23
第15図 造構出土遺物実測図3（1/3、1/2）	26
第16図 造構出土遺物実測図4（1/3）	27
第17図 搅乱出土遺物実測図（1/3、1/2、2/3）	30

## 表 目 次

表1 包含層出土遺物観察表	12
表2 造構一覧表	18
表3 造構出土遺物観察表	28
表4 搅乱出土遺物観察表	29

## 図版目次

図版 1	32
1. 調査区全景（東から）	32
2. 調査区北部（東から）	32
図版 2	33
1. 調査区南部・SD343、SD411（北東から）	33
2. 調査区東部（北から）	33
図版 3	34
1. SK307（南から）	34
2. SK605（南から）	34
3. SK644遺物出土状況（南東から）	34
4. SK644完掘状況（南東から）	34
図版 4	35
1. RP01土師器甕出土状況（北東から）	35
2. SE190（西から）	35
3. 調査区から第4・5次調査地点を望む	35
4. 作業風景	35
図版 5 出土遺物 1（包含層出土遺物 1）	36
図版 6 出土遺物 2（包含層出土遺物 2）	37
図版 7 出土遺物 3（遺構出土遺物 1）	38
図版 8 出土遺物 4（遺構出土遺物 2）	39
図版 9 出土遺物 5（遺構出土遺物 3）	40
図版 10 出土遺物 6（遺構出土遺物 4）	41
図版 11 出土遺物 7（搅乱出土遺物）	42

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経過

1997年12月26日に、福岡市建築局住宅計画課より、市営住宅建設に先だって、博多区古塚1丁目8における埋蔵文化財の有無について事前審査依頼が提出された。申請地は堅粕遺跡地内に所在し、南には堅粕遺跡第4・5次調査地点が位置していることから、埋蔵文化財課では1998年1月14・21日の2回に分けて試掘調査を行った。その結果、現代の建物等で破壊を受けているものの地表面下70~90cmの黄褐色砂層面上で遺構が検出され、弥生土器や須恵器片が出土した。この成果をもとに協議を行い、建物が建つ範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることになった。また、建築局住宅計画課と教育委員会埋蔵文化財課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は1998年3月12日に着手し、7月17日に終了した。

### 2. 調査体制

調査委託	福岡市建築局住宅計画課				
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 西 憲一郎				
調査総括	埋蔵文化財課 課長 柳田 純孝(前) 山崎 純男(現) 調査第2係長 山口 讓治(前) 力 武卓治(現)				
調査庶務	埋蔵文化財課第1係 河野 淳美(~1998年3月31日) 文化財整備課 谷口 真由美(1998年4月1日~)				
調査担当	試掘調査 杉山 富雄 中村 啓太郎 発掘調査 井上 蘭子 佐藤 一郎				
調査作業	青柳 行信	伊藤 美伸	乾 俊夫	横松 雅子	大橋 善平
	奥田 弘子	兼田 ミヤ子	桑原 美津子	高着 一夫	後藤 タミ子
	志堂 寺堂	柴田 博	高手 與志子	砥板 春美	野口リュウ子
	林 厚子	吹春 憲治	藤原 直子	前山 政義	松浦 滋子
	森本 良樹				
整理作業	大賀 順子	坂井 かおり	佐々木 涼子	藤 信子	山口 とし子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について建築局住宅計画課をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地と周辺の遺跡

福岡市の大半を占める福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に伸びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を西から、室見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美川が貢流し、それぞれの河川により開拓された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。地理的に詳しくみると、「福岡平野は海岸付近の砂丘および浜堤、それに続く低地、各河川に沿った沖積段丘を含む河成平野、沖積地背後の平坦面を形成する洪積段丘とに区分できる。」<sup>2)</sup> このうち、沖積地は臨海平野と河成平野に分けられ、各々博多湾岸を中心とする部分と河川に沿った氾濫原を中心とする部分とがある。

狹義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。福岡平野から見てみると、博多遺跡、比恵遺跡、那珂遺跡、板付遺跡、諸岡遺跡等、御笠川から宇美川にかけての博多湾東岸に形成された南北に長い砂丘上には、箱崎遺跡、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡、吉塚遺跡、森遺跡等が分布する。また、福岡平野の東を南北に走る月隈丘陵一帯には下臼井遺跡、上臼井遺跡、中山遺跡、席田青木遺跡、下月隈遺跡等が広がり、御笠川の東岸、諸岡丘陵と月隈丘陵に挟まれた沖積地には雀居遺跡が、宇美川が北から東へ流路を変える地点の西岸にあたる沖積地には大井遺跡が位置する。

堅粕遺跡は御笠川の東岸約500mに位置し、博多湾の海岸線に平行して形成された砂丘上に立地する。この砂丘は那珂川、御笠川、宇美川を主とした河川からの土砂が、荒津、名島という丘陵突出部を起点に弧状に堆積したものである。堅粕遺跡の西は博多遺跡、東は吉塚本町遺跡、箱崎遺跡とつながり、これらの遺跡群は同じ砂丘上に乗っていると考えられる。本調査地点は鹿児島本線を挟んだ東側、堅粕遺跡群のはば中央東寄りに位置し、南には第4次調査地点と第5次調査地点が立地する。

遺跡の性格を知る上で周辺の遺跡を概観してみる。

#### 箱崎遺跡

御笠川と宇美川に挟まれた南北に伸びる砂丘上に立地する。現在までに20次の調査が行われている。遺跡群の中央には、921(延喜21)年大宰府觀世音寺の坐女橋滋子に八幡大菩薩の託宣があり、923(延長3)年に、穂波郡の大分宮を遷座、創建した宮崎宮が位置する。創建時に近い構造は10世紀後半代の構のみでない。その他古墳時代初頭から近世まで変動はあるものの生活痕跡が認められる。

#### 吉塚本町遺跡

J R 吉塚駅周辺で箱崎遺跡と同じ砂丘上に位置する。現在までに4次の調査が行われている。弥生時代後期から古代にかけての集落跡や近現代の旧国鉄操車場の基礎等が検出されている。特に古代には土鍤、製塩土器等の漁労具、硯、瓦等を持つ集落が検出され、漁労、製塩等の生業を行いつつ公的な関係を持っていた集落と推定される。

#### 吉塚遺跡

堅粕4丁目、吉塚3丁目にまたがる。堅粕遺跡と同じ砂丘に位置する。現在までに7次の調査が行われている。弥生時代中期から中世にまたがる生活痕跡が検出されている。これまでに貨泉、銅鏡、山陰系瓶形土器、滑石製粧、白磁黒花等特色ある遺物が出土しており、堅粕遺跡や吉塚本町遺跡と共に中世における博多や箱崎との関連が伺える。

### 博多遺跡

御笠川と那珂川に挟まれ、博多湾岸に形成された砂丘上に位置する。現在までに123次の調査が行われている。中世都市「博多」を中心として弥生時代から近世、現代にまで続く複合遺跡である。特に中世における博多浜、息浜における都市の展開、太閤町割以前の町割りの復元、对外貿易の拠点都市を示す膨大な輸入陶磁器の出土など当時の「博多」を知る上で重要な資料を得ている。

### 比恵遺跡

博多遺跡と同じく御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の北端部分に立地する。現在までに71次の調査が行われ、特に弥生時代から古墳時代にかけての集落・墓塚等が検出されている。弥生時代前期では墳丘墓の可能性が指摘される壺棺墓群、中期～後期にかけては集落のほかに生産活動を伺わせる青銅鋳型と取瓶の出土、古墳時代前期の方形周溝墓、「那津官家」の可能性が指摘された後期の大型建物群・柵の検出等奴国の中でも重要な遺跡群の性格を示している。

### 雀居遺跡

御笠川の東岸、標高約5mの沖積地に位置する。現在までに13次の調査が行われている。縄文時代晩期末～古墳時代前半に至る集落跡、古代後期～末にかけての集落、水田址、弥生時代前期～中期にかけての土塙墓、壺棺墓、中世の水田址等、出土遺物、遺構は質・量ともに優れ、該期における拠点的な集落が営まれていたと考えられる。

### 大井遺跡

福岡空港の北側、宇美川が北から西へ流路を変える地点の西岸、約4mの沖積地上に立地する。現在までに1次の調査が行われた。中世の水田址が検出されている。この水田の拠点集落の検討など、今後の調査に期待することが多い。

以上のように、堅粕遺跡の周辺には弥生時代から中世を中心として各所に拠点的な集落が営まれていたと推定される遺跡が分布している。堅粕遺跡がこの遺跡群の中でどのような位置づけをなすのか、今後の調査も含めて検討していく必要があろう。

註

下山正一「第2章 福岡平野の縄文海進と第四紀層」『福岡平野の古環境と遺跡立地－環境としての遺跡との共存のために』  
1998 九州大学出版会

その他福岡平野の地形全般について次の書を参考にさせていただいた。

小林茂・磯翠・佐伯弘次・高倉洋彰 編『福岡平野の古環境と遺跡立地－環境としての遺跡との共存のために』1998 九州大学出版会



第1図 堅粕遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)

- |           |         |         |
|-----------|---------|---------|
| 1. 箱崎遺跡   | 4. 吉塚遺跡 | 7. 比恵遺跡 |
| 2. 吉塚本町遺跡 | 5. 豊塚遺跡 | 8. 雀居遺跡 |
| 3. 堅粕遺跡   | 6. 博多遺跡 | 9. 大井遺跡 |

## 2. これまでの堅粕遺跡群の調査

堅粕遺跡群はこれまでに8次の調査が行われてきた。その内容を概観してみる。

### 第1次調査

博多区千代1丁目地内に所在する。調査面積は360m<sup>2</sup>である。調査地は砂丘の頂上の南斜面に位置している。弥生時代後期末の上器を中心に、古墳時代後期、中世の遺物が出上している。特筆すべき点で包含層近くの搅乱から1/3程の破片であるが、「貨泉」が1点出土している。

### 第2次調査

吉塚本町遺跡との調査次数の混乱のため欠番

### 第3次調査

博多区千代2丁目292他に所在し、第一次調査地点と同じ高まりの並びに位置する。調査面積は565m<sup>2</sup>である。搅乱が多かったが、古墳時代前期の方形周溝墓2基、土壙墓17基、溝1条、奈良時代の土壙などが検出されている。

### 第4次調査

博多区吉塚1丁目1-4他に所在する。本調査区の南に位置する。調査面積は845m<sup>2</sup>である。奈良から平安時代を中心として古墳時代から近世までの遺物が検出されている。遺構として把握できたのは7世紀後半から10世紀中頃までであり、曲物を井筒とした井戸や移動式竈、布日瓦や軒平瓦、瓦当などが特筆される。

### 第5次調査

博多区吉塚1丁目568-2他に所在する。第4次調査地点の東隣に位置する。調査面積は1600m<sup>2</sup>である。ここでも古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されたが、第4次調査地点と同じく奈良から平安時代の時期を中心とする。古墳時代の馬具が出土した土壙墓、移動式竈が出上した堅穴住居跡、綠釉綠彩の小壺が副葬された木棺墓、10世紀代の溝、土壙、柱穴等が検出された。また、越州窯系青磁、綠釉陶器、墨書き土器等公的な施設の存在が推定される遺物も出土している。

### 第6次調査

博多区千代2丁目163他に所在する。調査面積は444.5m<sup>2</sup>である。搅乱が多く、不明確ではあったが、弥生時代の谷状地形、時期不明の上壙・柱穴等が検出された。

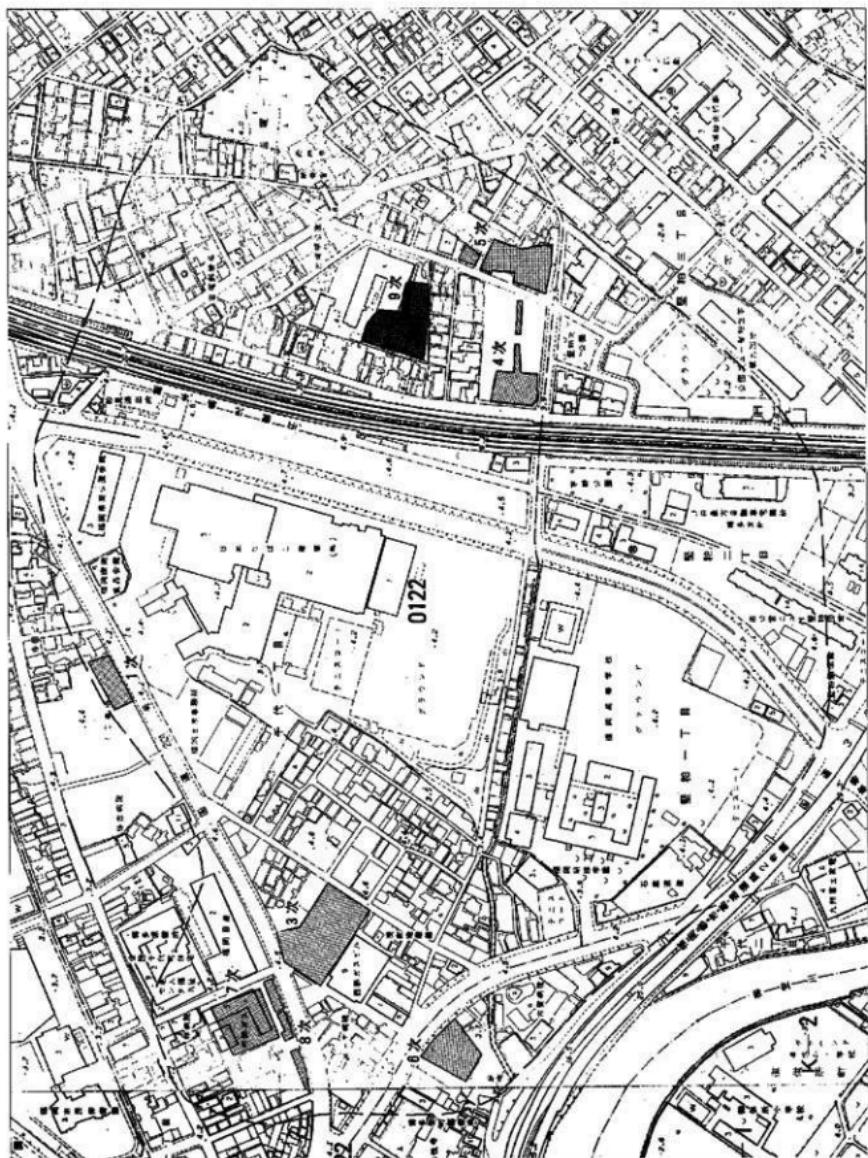
### 第7次調査

博多区千代1丁目20-30に所在する。調査面積は2084m<sup>2</sup>である。搅乱が著しいが、古墳時代前期を中心とする土壙・井戸等が検出された。飯蛸塗・土鍍が多い量に出土している。

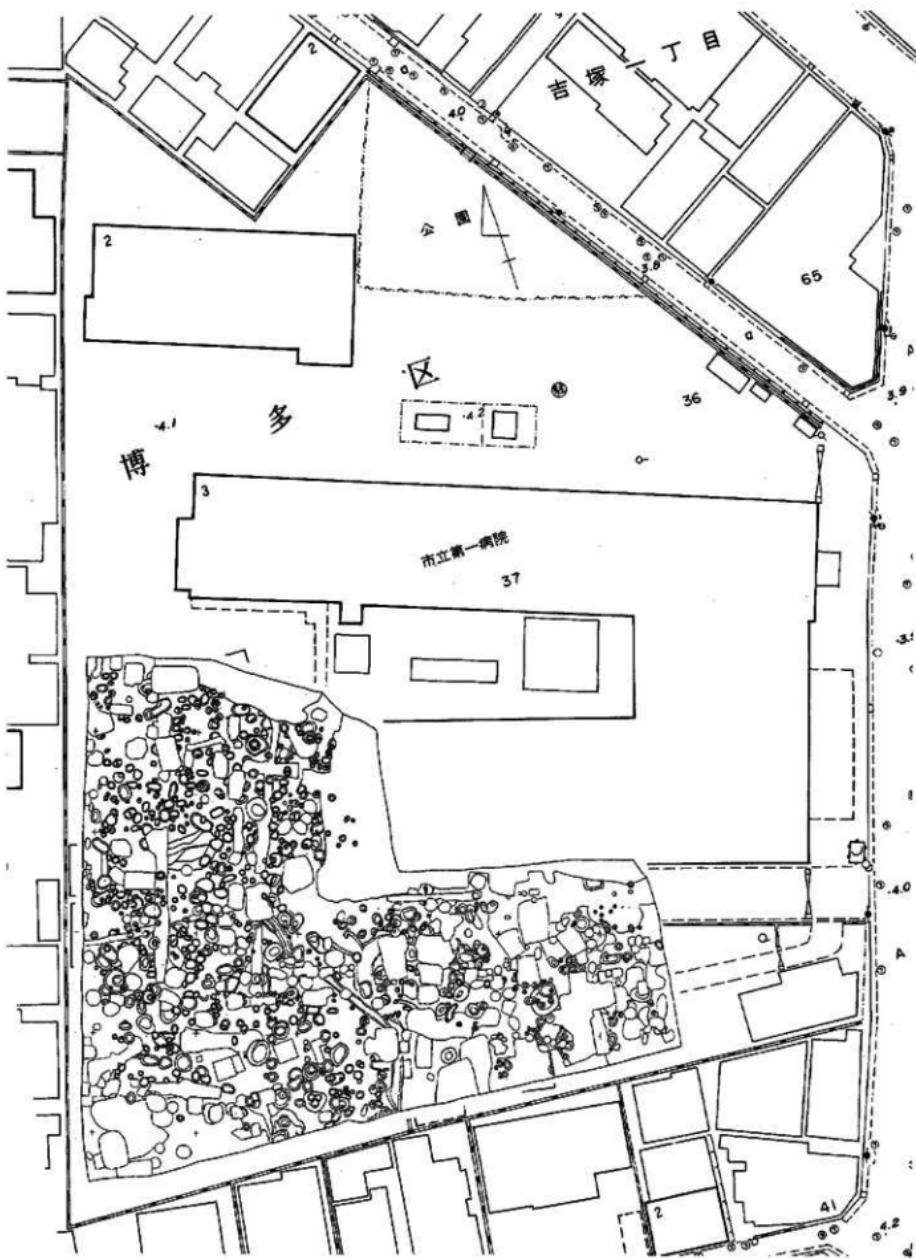
### 第8次調査

博多区千代1丁目地内に所在する。第3次・第7次調査地点に隣接する位置である。調査面積は542m<sup>2</sup>である。搅乱が激しく、遺構の検出が困難であったが、古墳時代前期の遺構・遺物が検出された。特に、土師器が直線的に並び、土師器壺内部から東側外にかけて滑石製玉類が散布していた遺構は注目される。報告中で、集落と墓域との境界付近における祭祀遺構であると推定している。

本調査区は、第4・5次調査地点の北側に位置している。両地点との関連や他地点との比較をあわせて検討したい。



第2図 堅粕遺跡群と第9次調査地点の位置図（1/4,000）



第3図 調査区位図 (1/500)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査概要

##### (1) 調査経過

堅粕遺跡第9次調査地点は、堅粕遺跡群の比定地内に所在すること、南に第4・5次調査地点が位置することから、遺構の存在は明らかであったが、申請面積が広大であること、旧建物による破壊が予想されたことから、試掘調査の段階で数本のトレンチを設定した。その結果、敷地の中央部は既存建物の基礎と地下室とで地表面下250cmまで破壊されていた。また、敷地北側はブレハブ等の設置と廃土置場にあてるため、さらに、敷地南東隅は樹木があり調査不可のため、調査区は申請地の南西部に設定した。1998年3月12日にバックホーによる表土剥ぎを開始した。調査区は申請地内の他の部分に比較して遺構面は残ってはいるものの、近年まで墓地と納骨堂が建っており、また、病院・保健所の搅乱でかなり破壊を受けていた。それでも地表面下70~90cmの盛土を除去すると黄褐色砂層面の遺構面（包含層）が検出され、その後は人力による遺構精査及び掘削を行った。調査区の面積が広大なため、グリッドを設定し、包含層が堆積している部分はそれを下げる後、遺構検出を行っていった。途中雨天が続き調査が滞ることもあったが、写真撮影・遺構実測を行い、7月17日に撤収、調査を終了した。

##### (2) 調査区の土層

調査区は、前述通り地表面下70~90cmは盛土であり、それを除去すると、黄褐色砂層の遺構面が現れた。標高3.8m前後である。この黄褐色砂層は20~30cmの厚さで堆積しており、その下は黄白色粗砂層となる。遺構は黄褐色砂層上面から検出されている。しかし遺構の覆土はやや暗い黄褐色砂であるため遺構検出は非常に困難であった。また、黄褐色砂層中には遺物が含まれており、包含層であると確認された。調査区内では、北側が建物による破壊が大きいため、この黄褐色砂包含層がほとんど削平され、下の黄白色粗砂層となっていた。この面では遺構が比較的明確に検出された。そのため、遺構検出は、黄褐色砂層を人力で掘り下げながらの作業となった。

近接する第4・5次調査地点と土層の比較をしてみる。すぐ南側の第4次調査地点では、厚さ20~40cmの表土の下が6~10世紀代の遺物を含む暗黄褐色砂質土で古代の整地層と考えられ、この層の上面が第一面の遺構面となっている。遺構は奈良から平安時代を中心とする。その下が薄い黄褐色砂層、地山の灰白色微砂層（本調査での黄白色粗砂層）となる。この地点の遺構面である暗黄褐色砂質土は申請地内の東側には存在しないため、東側が削平を受けているとしている。また、第5次調査地点においては、厚さ20~40cmの表土下はすぐに黄褐色細砂層となり、この面が遺構面となる。古墳時代から平安時代までの遺構が検出されている。

この両地点から検討してみると、本来は古代の整地層が堆積しており、その上から奈良から平安時代を中心とする遺構が掘り込まれていたと考えられる。しかし、近年削平を受け、古代の整地層は部分的にしか残らず、第4次調査地点の東側、第5次調査地点及び本調査地点には整地層は存在しない。また、第5次調査地点では古墳時代の上塙墓が検出されており、黄褐色砂層面が奈良時代以前の遺構面であったと考えられる。その他、本調査地点では黄褐色砂層がかなり厚めに堆積しており、南から北へ向かい、この層が厚く堆積していたと推定される。さらに本調査地点では弥生時代の遺構が検出されており、黄褐色砂層面の下層の黄白色粗砂層面が古墳時代以前の遺構面であると推定される。



第4図 調査区造構配図 (1/200)

## 2. 遺構と遺物

### (1) 包含層出土遺物（第5・6図）

本調査区では第4図のようにグリッドを設定し、包含層を掘り下げ遺物を取り上げた。以下、グリッドごとに遺物の説明を行う。

B—1 出土遺物 1は土師器の高坏脚部である。底径8cmを測る。裾端部に沈線がめぐる。内外面共にナデが施され、黄～赤褐色を呈す。砂粒、金雲母を含む。7世紀代か。

B—2 出土遺物 4は土師器の壺である。口径27.8cmである。外面と口縁部内面にハケメを施し、胴部内面にはヘラケズリを施す。赤褐色を呈し、胎土に金雲母を少量含む。8世紀代であろう。

C—2 出土遺物 2は須恵器の高坏脚部である。底径8.5cmを測る。裾はラッパ状に大きく開き、端部が屈曲する。外面に二条の沈線がめぐる。外面にヨコナデが施され、暗灰褐色を呈す。7世紀前半であろう。

C—2・3 出土遺物 3は須恵器の高坏環部である。復元口径10cmを測る。外面に二条の沈線がめぐり、ヨコナデが施される。灰褐色を呈す。7世紀初頭頃か。5は弥生時代後期複合口縁壺の口縁部である。復元口径13.4cmを測る。外面は一部ハケメを施しその後ナデつけ、口縁部内面はハケメ後ナデ消す。その他はナデを施す。外面は淡赤褐色、内面は黄褐色を呈す。金雲母をやや多く含む。6は土師器の高坏である。裾がやや大きく開く脚部に大きく開く坏がつく。脚部には孔が一つ穿たれいるが本来いくつになるか不明である。ナデが施され、明黄褐色を呈す。カクセン石、金雲母を含む。古墳時代前期であろう。7は弥生時代の高坏である。復元口径32mmを測る。口縁部はゆるい段差を作りながらく字状に屈曲する。外面は、口縁部にナデ、その下にハケメを施す。内面は部分的にハケメを施し、ナデ消している。外面は黄褐色、内面は赤みを帯びた黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。

C・D—2 出土遺物 8は須恵器で壺の口縁部である。復元口径19cmを測る。口縁部を平たく作り出し、口縁部から張部にかけて丸みを帯びたく字状に屈曲する。外面に格子目タキ痕、内面に青海波の当て具痕が残る。青灰色を呈し、胎土に金雲母、カクセン石を含む。

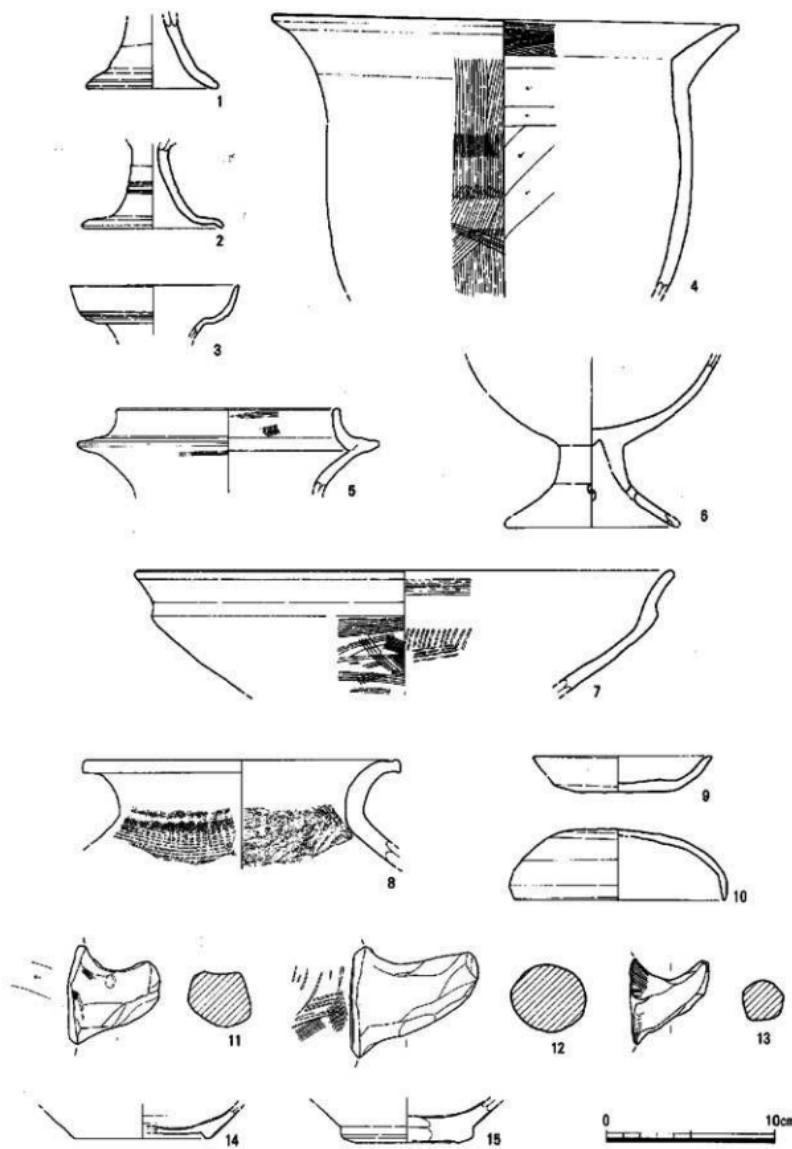
D—1 出土土器 9は土師器皿である。復元口径10.5cmを測る。外面底部は回転ヘラケズリで板状圧痕が残る。淡黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。10は須恵器の蓋である。口径12.5cmを測る。大井部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデで調整する。赤褐色を呈し、黒斑がある。7世紀初頭である。

D—3 出土遺物 11、12、13は土師器の瓶の把手である。11は残長5cm、部分的にハケメが、内面にはヘラケズリが施され、淡黄褐色を呈す。断面は不定五角形を呈す。12は残長8cm、内面にハケメが施され、赤～黄褐色を呈す。断面は円形を呈す。胎土に金雲母を含む。13は残長4.5cm、器面と接する部分は指でナデつけた後ハケメを施している。淡赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。

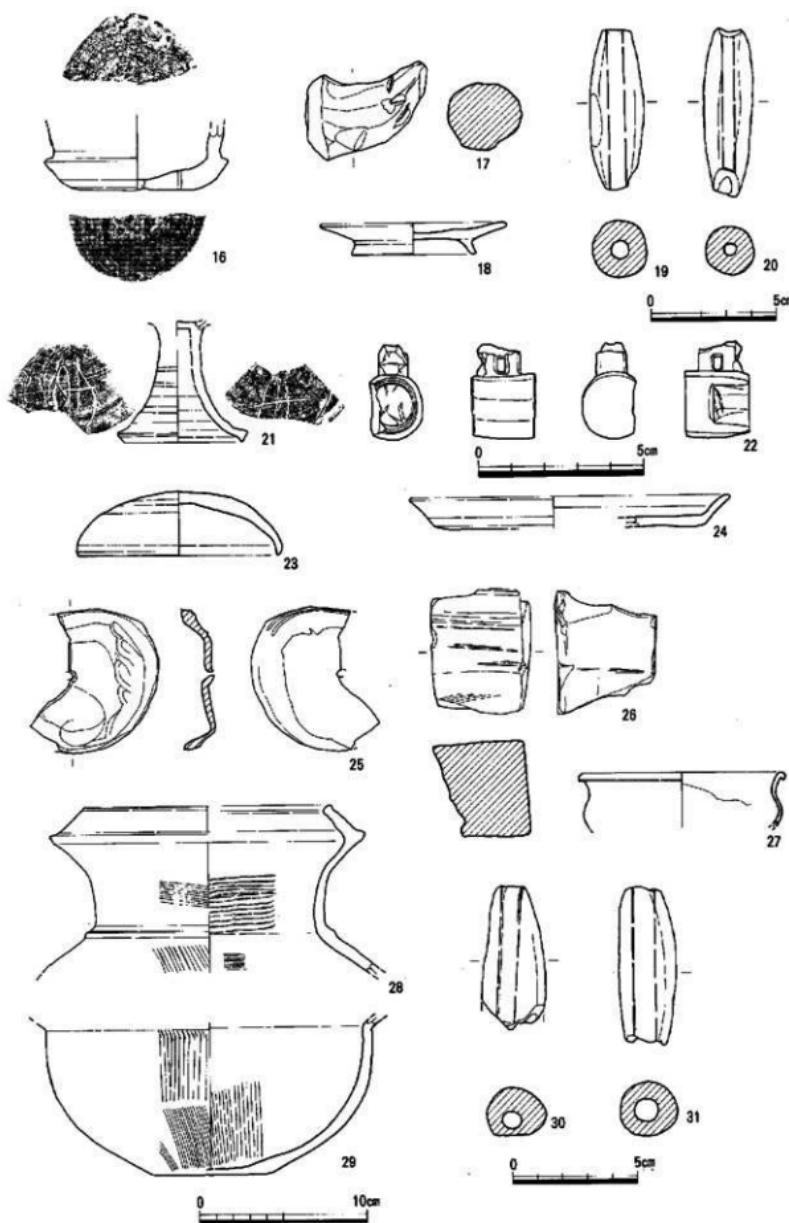
D—6 出土遺物 14は越州窯系青磁碗の底部である。底径8cmを測る。淡いオリーブ色の釉をかける。底部は露胎である。胎土は精良である。15は白磁碗である。底径8cmを測る。淡いオリーブ色に近い釉を内外面にかけるが、底部付近は露胎となる。胎土は精良である。12世紀代か。

E—2 出土遺物 16は須恵器のすり鉢である。底径13cmを測り、器壁は厚く、どっしりした作りである。底部外面と内面の両方から穿孔されているが、貫通しているものとしていないものとがある。底部は回転ヘラケズリ、内外面はナデで仕上げられており、青灰色を呈す。胎土にはやや大きめの砂粒を多く含む。7～8世紀。19は土錘である。全長6.5cm、径2.2cmを測る。黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。

E—4 出土遺物 17は瓶の把手である。長さ7cm、径4.5cmを測る。やや赤みを帯びた黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。18は高台付きの土師器の皿である。口径11cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデで仕上げる。高台は断面八の字形に貼り付けられる。外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈し、胎土には金雲母を含む。10世紀代であろう。



第5図 包含層出土遺物実測図1 (1/3)



第6図 包含層出土遺物実測図2 (1/3, 1/2, 2/3)

E・F-1 出土遺物 21は須恵器の高杯脚部である。底径7.5cmを測る。端部は内側につまみ出して作り出される。内外面共にヨコナデで仕上げられる。器壁外面と内面に「冊」という漢字に似たヘラ記号が刻まれている。灰褐色を呈す。7世紀初頭である。23は須恵器の蓋である。口径12cmを測る。口縁端部が若干内側に屈曲する。天井部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデを施す。自然釉がかかる。青灰色を呈す。7世紀前半である。22は滑石製品である。一部欠損しているが、底部を抜かずにつくりぬき、つまみがついたピールジョッキ形を呈す。高さ2cm、横幅3cmを測る。用途は不明である。

E・F-2 出土遺物 20は土鍤である。ほぼ完形で、長さ7cm、最大径2cmを測る。淡赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。24は須恵器の皿である。復元口径17.3cmを測る。口縁端部がやや外反する。底部は回転ヘラケズリ、内部は回転ナデで仕上げる。黄灰色を呈す。8世紀代であろう。

その他包含層出土遺物 25は土師器の用途不明品である。一部欠損しているが、平面は不整梢円形を呈していたと考える。断面は皿状の形状を呈し中央に穿孔されている。外面は剥離しているため、本来どのような形状を呈していたか不明である。指押さえで成形後ナデで仕上げ、外面上には端部に沿って一条の沈線が施されるが全面をめぐらない。黄褐色を呈し、胎土は精良で金雲母を含む。28、29は弥生土器である。28は複合口縁蓋である。口径部はく字形に屈曲し、頸部から胴部の屈曲部に一条突帯をめぐらせる。外面は、頸部から胴部にかけてハケメ調整が見られ、頸部はナデ消される。内面も同様頸部から胴部にかけてハケメ調整が見られ、胴部をナデ消す。淡黄褐色を呈す。弥生時代後期である。29は体である。頸部径は19cm、底径7cmを測る。底部は平底で、ボール状を呈す。内外面共にハケメを施す。外面に黒斑が見られ、黄褐色を呈す。胎土に金雲母を含む。弥生時代後期である。26は壺である。方形を呈しているが、一部欠損している。残存している部分の幅は5.5cm×6cmである。27は肥前系の青磁香炉である。口径12.4cmを測る。外面と内面の一部に釉がかけられ、内面下部は露胎となる。釉色は淡灰緑色を呈す。近世である。30、31は上鍤である。30は残長5.8cm、最大径2.5cm、31は全長6.5cm、最大径2.3cmを測る。胎土に金雲母を含む。

表1 包含層出土遺物観察表

件名	地	地	種	形	量	1.	外	内	調査	色	質
第5段1	B-1	土師器	高杯	底径8cm	渺々・金雲母含む	凹凸ナデ	トゲ	青灰色	7世紀		
2	C-2	須恵器	高杯	底径8.5cm	焼成	凹凸ナデ	ナデ	暗褐色	7世紀前半		
3	C-2-5	須恵器	高杯	口径10cm	砂粒含む	回転ヘラケズリ・凹凸ナデ	凹凸ナデ	灰褐色	7世紀初期		
4	B-2	土師器	壺	口径27.8cm	砂粒・金雲母含む	ハケメ	ハケメ・ナデ	赤褐色	8世紀		
5	C-2-3	弥生土器	環合1健座	口径13.4cm	砂粒・金雲母含む	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	淡黄褐色・黄褐色	弥生時代後期		
6	C-2-3	土師器	高杯	底径16cm	渺々・金雲母含む	凹凸ナデ	ナデ	明灰褐色	古墳時代前半		
7	C-2-3	弥生土器	高杯	口径32cm	砂粒・金雲母含む	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	青褐色	弥生時代		
8	C-2-2	須恵器	壺	口径19cm	砂粒・金雲母・ヨセヒリ吉野	凹凸ナデ	青褐色	青褐色			
9	D-1	土師器	壺	口径10.5cm	渺々・金雲母含む	凹凸ナデ・凹凸ナラズリ・無鉄渣	凹凸ナデ	淡灰褐色			
10	D-1	須恵器	壺	底径12.5cm	砂粒含む	凹凸ナデ・回転ヘラケズリ	凹凸ナデ	中褐色	7世紀初期		
11	D-3	二脚器	壺	底径8cm	砂粒含む	ハケメ・ナデ	ハケメ	淡褐色			
12	D-3	土師器	壺	底径8cm	渺々・金雲母含む	ナデ	ハケメ	赤・黄褐色			
13	D-3	土師器	瓶	底径4.5cm	渺々・金雲母含む	ナデ・ハケメ	トゲ	淡褐色			
14	D-6	地用具	瓶	底径8cm	焼成	焼成	焼成	成りり・ブ色			
15	E-2	白磁	壺	底径8cm	砂粒含む	一部焼成	焼成	赤オリーブ色	12世紀		
第6段16	E-2	須恵器	トリ鉢	底径13cm	渺々・金雲母含む	ナデ	ナデ	青灰色	7・8世紀		
17	F-4	土師器	壺	底径7cm	渺々・金雲母含む	凹凸ナデ	ナデ	淡青・青褐色			
18	E-4	土師器	高台付き壺	口径11cm	渺々・金雲母含む	凹凸・ヘラケズリ・凹凸ナデ	凹凸ナデ	赤・青褐色	10世紀		
19	E-2	土師器	壺	底径8.5cm	渺々・金雲母含む	ナデ	ナデ	淡褐色			
20	E-F-2	土鍤	高台付き壺	底径7cm	砂粒・金雲母含む	ナデ	ナデ	淡褐色			
21	E-F-1	便器	高杯	底径7cm	砂粒含む	凹凸ナデ	ナデ	灰褐色	7世紀初期		
22	F-E-1	滑石製品	-	2cm×3cm	-	-	-	-	-		
23	E-F-1	便器	壺	口径12cm	砂粒含む	凹凸・ヘラケズリ・凹凸ナデ	凹凸ナデ	淡青・青褐色	7世紀前半		
24	E-F-2	瓶	立	口径17.3cm	焼成	凹凸・ヘラケズリ・凹凸ナデ	凹凸ナデ	古灰褐色	6世紀		
25	包含層	土師器	壺	底径8.5cm	砂粒・金雲母含む	凹凸ナデ・ナデ	ナデ	黄褐色			
26	包含層	壺	-	6.5cm×6cm	-	-	-	-	-		
27	包含層	滑石製品	立	口径12.4cm	焼成	砂粒	-	淡灰褐色	近世		
28	包含層	土牛土器	複合口縁壺	口径14.6cm	砂粒含む	ハケメ・ナデ	ハケメ	淡褐色	弥生時代後期		
29	包含層	土牛土器	許	底径7cm	砂粒・金雲母含む	ハケメ・ナデ	ハケメ	黄褐色	弥生時代後期		
30	包含層	土師器	瓶	底径8.8cm	砂粒・金雲母含む	ナデ	ナデ	青褐色			
31	包含層	-	土鍤	底径6.5cm	砂粒・金雲母含む	ナデ	ナデ	米褐色			

## (2) 検出遺構

ここでは包含層上面及び包含層除去後検出された遺構についての説明を行う。

### ① ピット（第7図）

SP32 長径60cm、短径36cm、深さ48cmを測る。移動式竈の破片が出土している。

SP55 長径48cm、短径36cm、深さ36cmを測る。土師器壺が出土している。

SP87 長径60cm、短径44cm、深さ44cmを測る。須恵器蓋が出土している。

SP355 長径58cm、短径48cm、深さ38cmを測る。土師器壺が出土している。

### ② 土壙（第7～10図）

SK6 平面不整楕円形を呈し、長径146cm、短径75cm、深い部分で90cmを測る。二段掘りの形状を呈す。弥生土器が出土している。

SK20 半分搅乱に切られているが、本来は楕円形であったろう。径は120cm、深さ50cmを測る。遺物はまとまって出土している。土師器鉢、須恵器壺がある。

SK27 楕円形を呈し、長径96cm、短径86cm、深さ52cmを測る。弥生土器が出土している。

SK43 不整長方形を呈す。いくつかのピットに切られている。長軸150cm、短軸130cm、深さ14cmで中央に掘り込みがある。移動式竈片が出土している。

SK49 不整楕円形を呈す。長径104cm、短径100cmである。深さ58cmで端に掘り込みがある。土師器の壺と壺が出土している。

SK52 円に近い楕円形を呈す。長径126cm、短径110cmを測る。深さ44cmで端に小さな掘り込みがある。土師器壺が出土している。

SK61 楕円形を呈す。長径110cm、短径100cm、深さ40cmを測る。須恵器蓋、土師器壺が出土している。

SK73 不整楕円形を呈す。長径120cm、短径64cmを測る。深さは44cmで端に掘り込みがある。滑石製石錐未製品が出土している。

SK117 不整楕円形を呈す。長径120cm、短径90cm、深さ60cmを測る。須恵器壺が出土している。

SK127 楕円形を呈す。長径96cm、短径80cmを測る。二段掘りとなり、深い部分で90cmを測る。土師器壺が出土している。

SK160 楕円形を呈す。長径76cm、短径60cm、深さ30cmを測る。須恵器の提瓶と思われる口縁部が出土している。

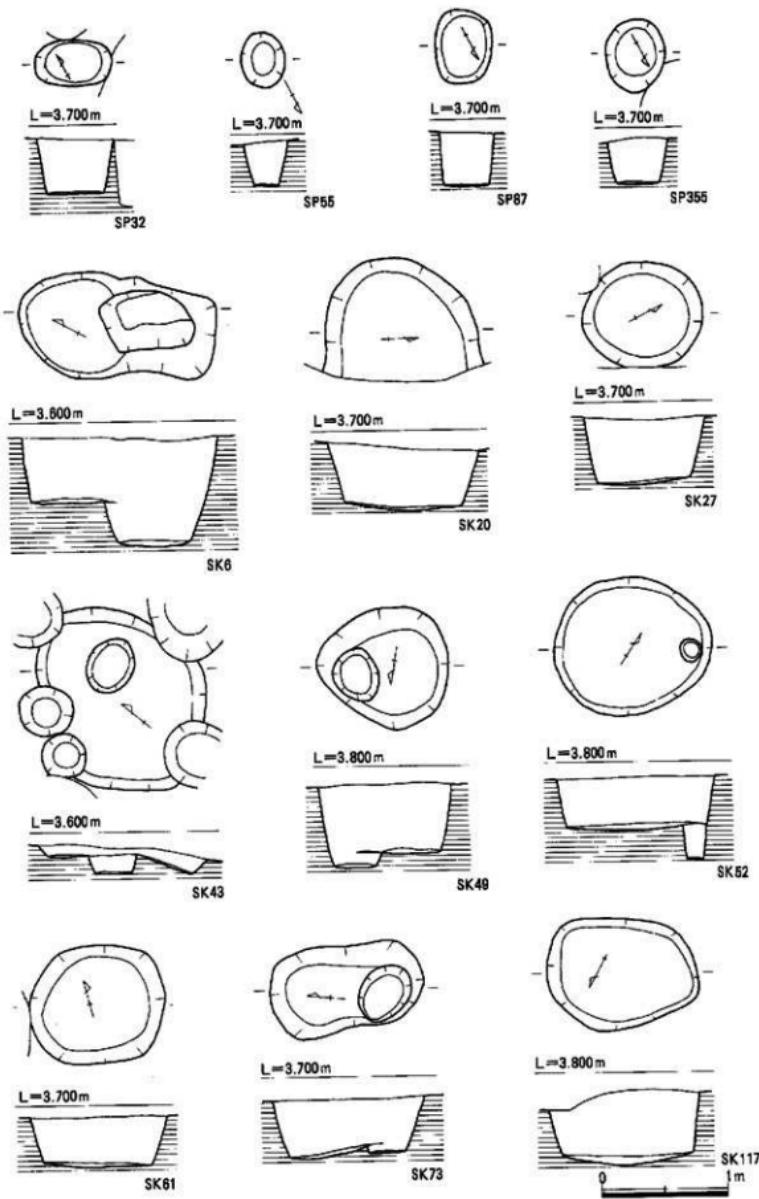
SK198 不整楕円形を呈す。長径220cm、短径164cm、深さ100cmを測る。土師器の小皿と壺が出土している。

SK226 他の遺構に半分切られているが、楕円形を呈すと思われる。長径140cm、深さ36cmを測り、断面は逆台形を呈す。須恵器の壺と思われる把手が出土している。

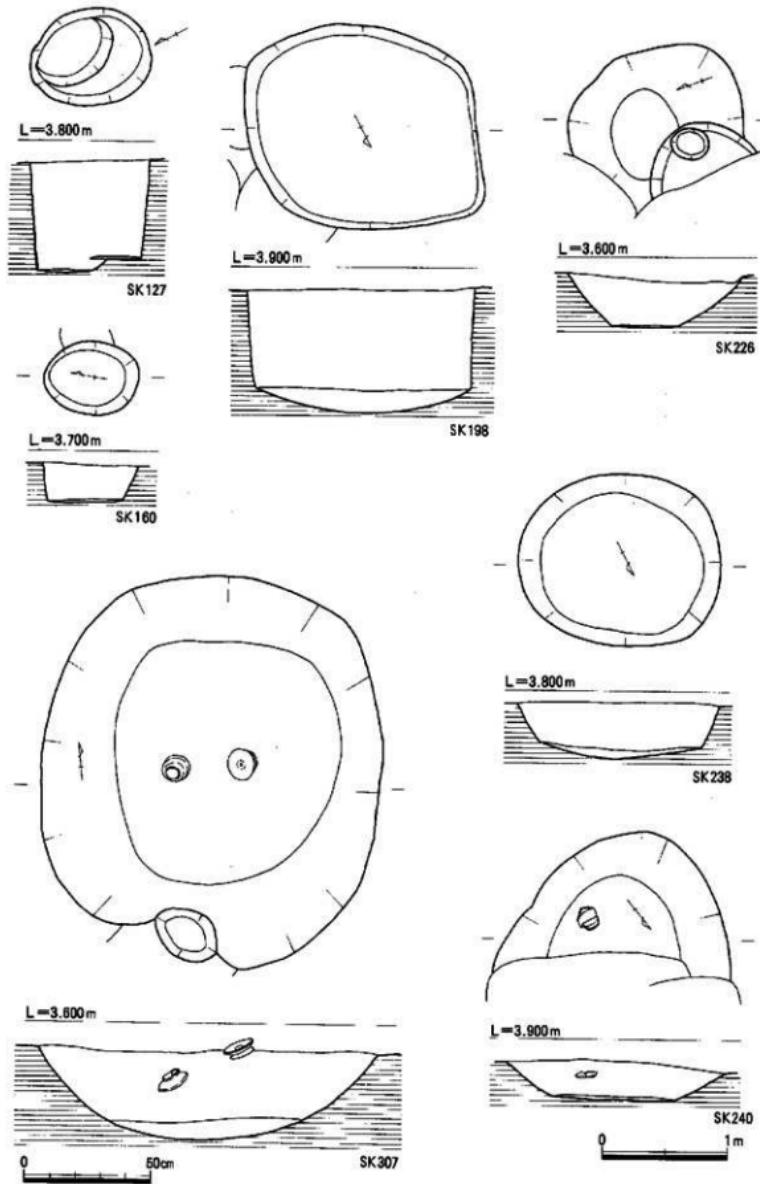
SK238 楕円形を呈す。長径164cm、短径140cm、深さ46cmを測る。断面は逆台形を呈す。土師器の壺と壺が出土している。

SK240 他の遺構に切られているが、楕円形を呈すと思われる。残存部の最大径は186cm、深さ30cmを測る。断面逆台形を呈す。土師器の壺と壺が出土している。

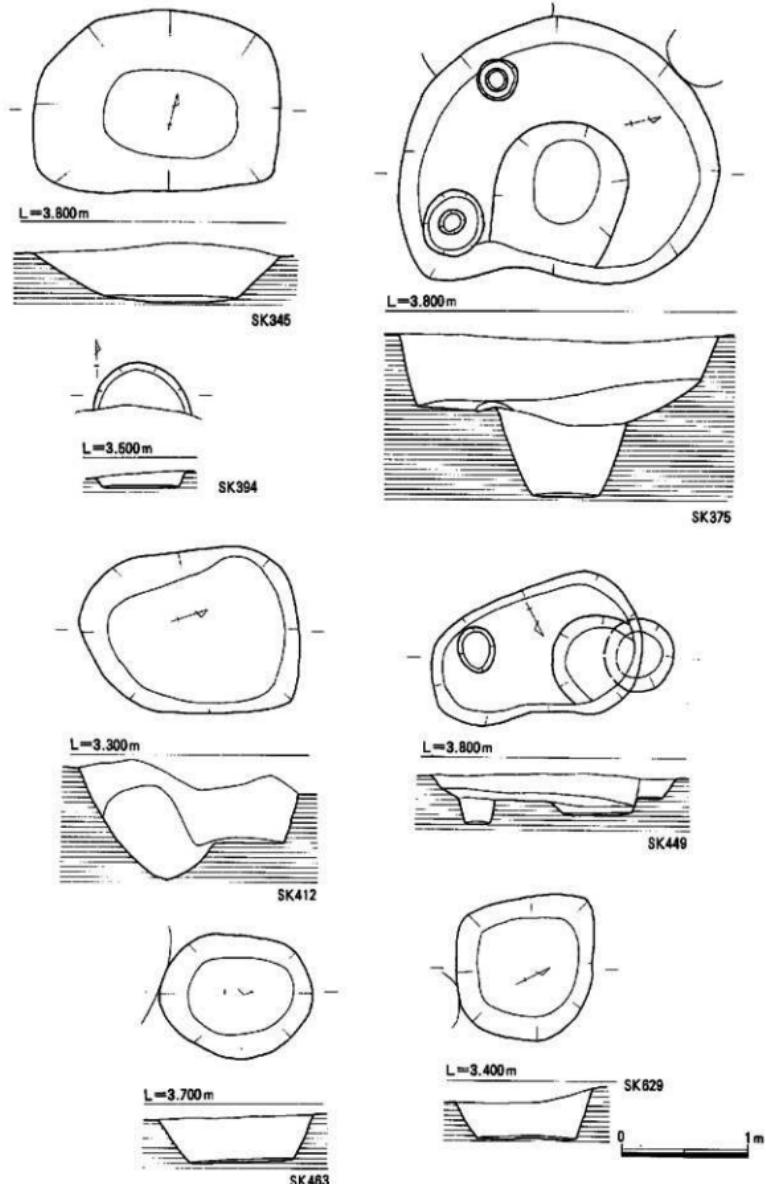
SK307 円に近い楕円形を呈す。長径160cm、短径137cm、深さ36cmを測る。断面は半円形を呈す。覆土の中央上部で土師器の壺と高台付きの皿が出土した。両方とも完形である。墓の可能性もあるが、骨などは出土しておらず、土壙とした。



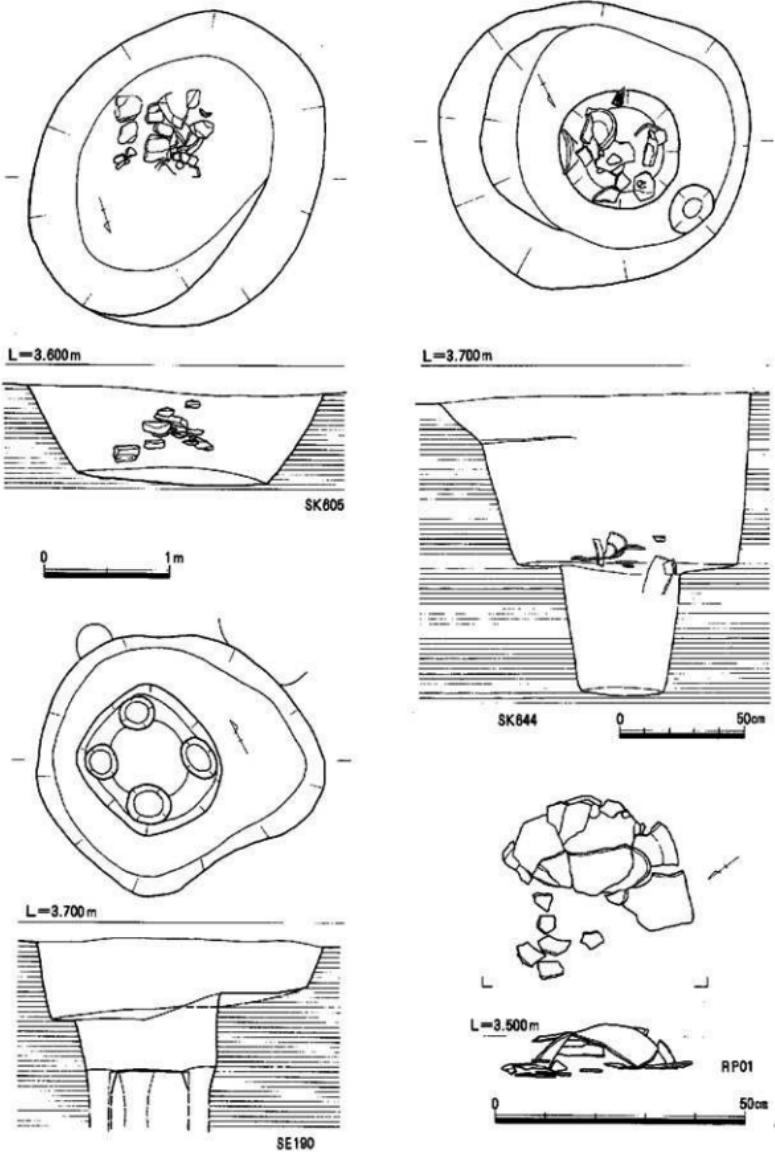
第7図 造構実測図1 (1/40)



第8図 遺構実測図2 (1/40, 1/20)



第9図 遺構実測図3 (1/40)



第10図 遺構実測図4 (1/40, 1/20, 1/10)

SK345 隅丸長方形を呈す。長軸196cm、短軸144cm、深さ40cmを測る。断面は逆台形を呈す。須恵器の壺が出土している。

SK375 不整楕円形を呈す。長径252cm、短径206cmを測る。中央には掘り込みがある。深い部分で126cmを測る。滑石製品が出土している。

SK394 半分切られているが、楕円形を呈すと思われる。残存部最大径76cm、深さ12cmを測る。石劍を転用したものが出土している。

SK412 やや三角形に近い楕円形を呈す。長径170cm、短径160cm、最も深い部分で96cmを測る。須恵器の壺が出土している。

SK449 不整楕円形を呈す。長径170cm、短径114cmを測る。柱根状の段掘りが2カ所ある。最も深い部分で40cmである。土製円瓶が出土している。

SK463 楕円形を呈す。長径120cm、短径100cm、深さ38cmを測る。断面逆台形を呈す。砥石が出土している。

SK605 楕円形を呈す。長径264cm、短径222cm、深さ76cmを測る。断面逆台形を呈す。土壇内の上面から底部まで石が大量に投げ込まれた状態で検出された。中に遺物も混入していた。土師器の蓋、壺、皿などが出土している。

SK629 不整方形を呈す。最大長110cm、深さ40cmを測る。断面逆台形を呈す。上鍤が出土している。

SK644 円に近い楕円形を呈し、二段掘りである。柱穴の可能性もある。長径125cm、短径115cm、最も深い部分で122cmを測る。段落ちの上面に遺物が検出された。上師器の瓶、器台、須恵器壺が出土している。

RP01 調査区北寄りではほぼ完形に近い上師器の壺が押しつぶされた形で検出された。這構が検出にくい面ではあるが、おそらく壺方は伴っていないといえる。据え置かれていたのであろうか。

### ③ 井戸（第10図）

SE190 不整楕円形を呈す。長径230cm、短径210cmを測る。中央で二段掘りになる。中央の掘り込みは平面隅九方形を呈し、一辺が100cmを測る。四隅に支柱が配され、その中央に井筒と思われる掘り込みがあった。しかし時間の制約上下まで掘ることはできなかった。堀方から須恵器の蓋と壺、上師器の壺と瓶の把手が出土した。

表2 遺構一覧表

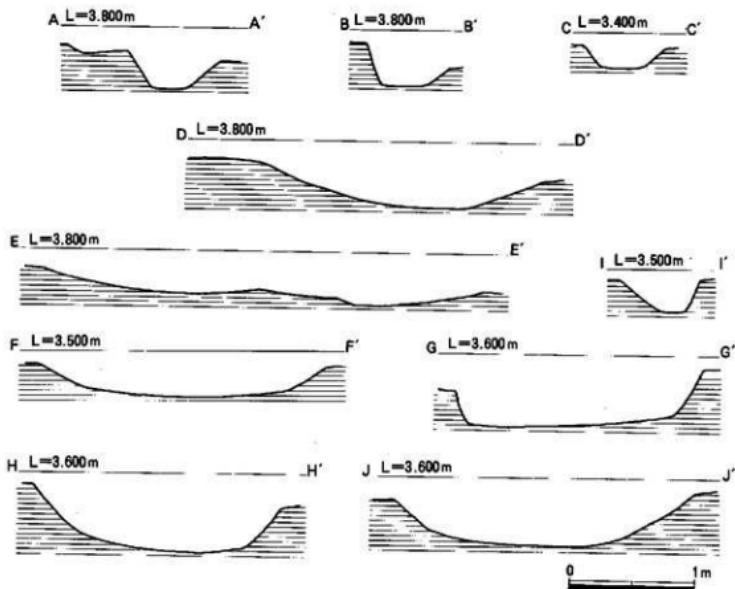
編	名	平面形	直径(cm)	幅径(cm)	深さ(cm)	出土物	編	名	平面形	直径(cm)	幅径(cm)	深さ(cm)	出土物	
第7区	SP22	楕円形	60	56	18	移動式壺	SK226	楕円形	140	—	—	36	須恵器	
	SK55	楕円形	48	36	36	上師器	SK230	楕円形	164	140	—	46	土師器蓋・坪	
	SK97	楕円形	60	44	44	須恵器蓋	SK240	楕円形	106	—	—	30	土師器蓋・坪	
	SP555	楕円形	58	48	38	土師器蓋	SK307	楕円形	166	137	—	35	上師器蓋・坪	
	SK8	不整楕円形	146	75	90	泥瓦土器	第9区	SK348	西瓦長方形	190	144	—	49	須恵器
	SK20	楕円形?	120	—	50	土師器蓋・瓶・蓋等	SK375	不整楕円形	252	206	—	126	竹刀類	
	SK27	楕円形	96	86	82	泥瓦土器	SK394	楕円形?	—	76	—	12	土師器用品	
	SK43	不整長方形	156	130	14	移動式壺	SK412	不整楕円形	179	160	—	56	須恵器	
	SK49	不整楕円形	104	100	38	二師器蓋・坪	SK449	不整楕円形	119	114	—	40	二葉円盤	
	SK52	楕円形	128	110	41	土師器	SK463	楕円形	129	100	—	39	鏡	
	SK61	楕円形	113	100	40	須恵器蓋・土師器	第10区	SK505	楕円形	264	227	—	75	七輪香炉・坪・三
	SK73	不整楕円形	120	64	44	滑石鏡心・鏡座・蓋等	第9区	SK629	小師方	110	—	—	40	土師
	SK117	不整楕円形	120	93	60	須恵器	第10区	SK644	楕円形	125	115	—	122	土師器・坪・瓶・鏡座・坪
第8区	SK121	楕円形	96	89	90	土師器	H101	能力なし	—	—	—	—	土師器	
	SK160	楕円形	76	60	30	灰陶器底盤	SK390	小整楕円形	230	210	—	—	灰陶器・坪・土師器・坪	
	SK108	小整楕円形	220	164	170	土師器・小師・坪								

④ 溝・河川（第11・12図）

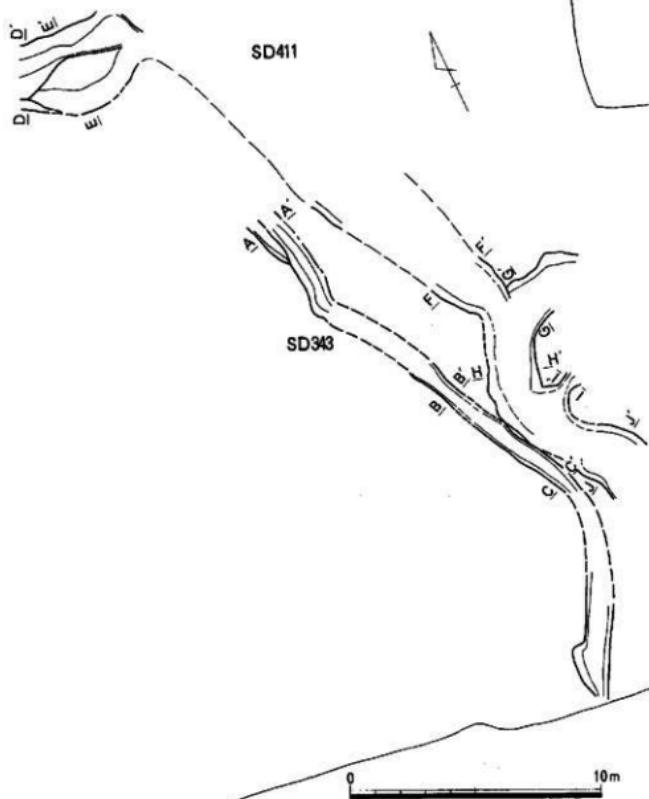
調査区の中央に溝と河川が検出された。溝は調査区南側から北北西にかけて比較的はっきりと検出された。河川は途中まで溝と並ぶように走っている。それぞれについて説明する。

SD343 調査区の南から北へ、途中で向きを変えて北北西の方向へ走る。幅は約70cm、深さ20cmから40cmを測り、断面は逆台形を呈す。途中で擾乱や造構に切られており、調査区中央で途切れている。何らかの施設を区画する溝だった可能性もある。図示できる遺物は少なかったが、ヘラ記号が刻まれた須恵器の蓋が出土している。遺物については後の項で説明を加えるが、7世紀前半頃と考える。

SD411 地山面上を精査中、やや淡い赤褐色を呈した砂層が検出された。これは連続しているわけではなく、造構や擾乱の間を織うように現れている。また、大きな擾乱の断面を見ると、河川状の堆積として検出された。この河川は、SD343と平行するように調査区南から北北西の方向へ、途中支流を分けながら走っている。SD343が途切れるあたりでこの河川も消えている。しかし、調査区中央やや北寄りで西→東の向きで走る河川状の堆積が検出され、若干距離はあるが、つながるのではないかと考える。SD343と異なり、断面は緩やかな弧を描き、人為的に掘削されたものではないと思われる。幅は2~2.5m、広い部分で約3.5m、深さは20~50cmでそれほど深くはない。図示できる遺物は少なかったが、土師器・陶器の壺が出土している。



第11図 SD343, SD411 断面図 (1/40)



第12図 SD343, SD411 造構配置図 (1/200)

### (3) 遺構出土の遺物

ここでは各遺構ごとに出土遺物の説明を行う。

#### ① ピット出土遺物（第13図32～35）

SP32出土遺物 32は移動式壺の破片である。残長13cmである。炊き口の鉢が残る。鉢の断面形はやや細長い三角形を呈す。指押さえとナデで成形し、部分的にハケメを施す。明赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。

SP55出土遺物 33は土師器の壺である。復元口径16.6cmを測る。口縁部から頸部にかけてなだらかに続く。内面及び外面の頸部付近まではナデで仕上げ、復元口径18cmを測る。外面の胴部には格子目状のタタキが施される。赤褐色を呈し、胎土に金雲母を多量に含む。

SP87出土遺物 34は須恵器の蓋である。口径14cmを測る。天井部につまみがつき、器壁は厚くややぼってりとした作りである。天井部はカキ目、内外面は回転ナデで仕上げる。青灰色を呈す。6世紀代か。

SP355出土遺物 35は土師器の高坏である。復元口径10cmを測る。口縁部から胴部にかけてやや丸く内湾する。ナデで調整する。赤白～明赤褐色を呈す。

#### ② 土壤出土遺物（第13～16図）

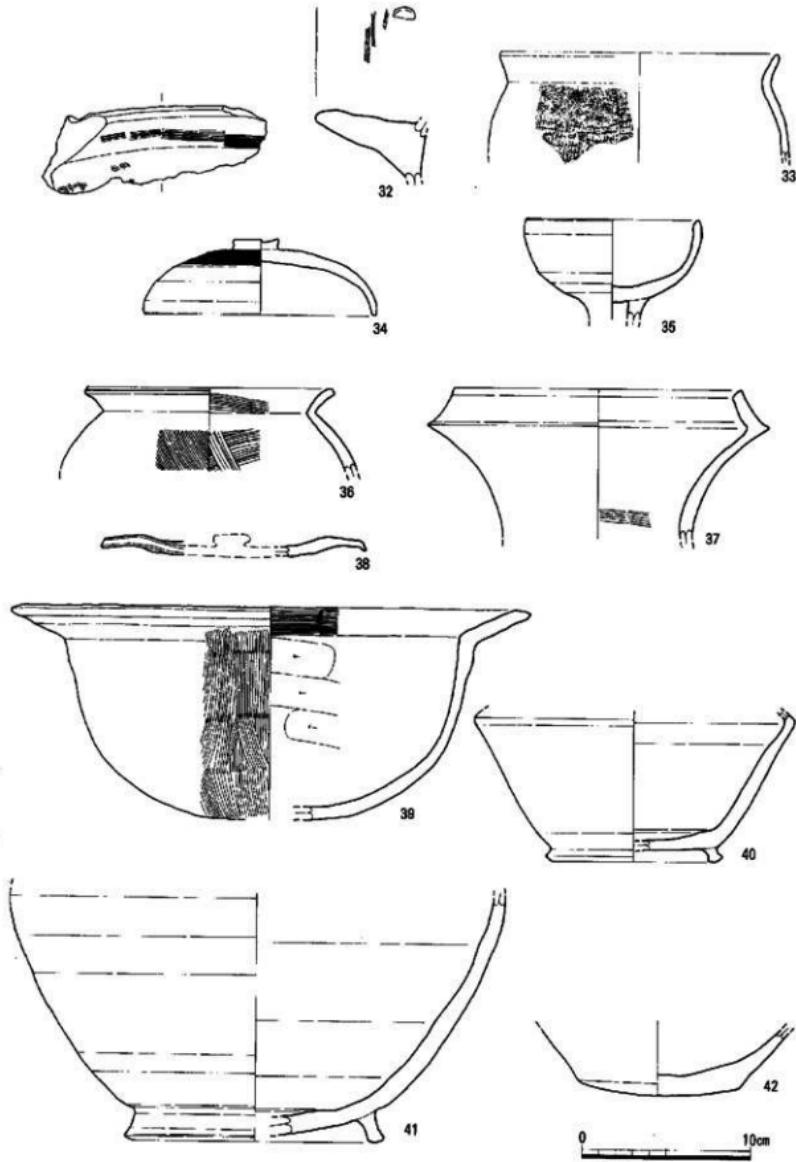
SK 6 出土遺物 弥生土器が出土している。36は壺の破片である。復元口径15cmを測る。口縁部から胴部にかけてく字状に屈曲し、口縁端部には沈線がめぐらされる。内外面の胴部と口縁部内面にハケメが施される。淡黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。37は複合口縁壺の破片である。復元口径20cmを測る。口縁部から頸部にかけて逆く字状に屈曲する。摩耗のため調整は定かではないが、頸部内面に一部ハケメが見える。淡黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。36、37とも弥生時代後期である。

SK20出土遺物 比較的まとまって遺物が出土している。38は須恵器の蓋である。変形し、一部のみの残存があるがつまみがついていたと思われる。復元口径16cmを測る。回転ヘラケズリと回転ナデで調整する。やや青みを帯びた灰褐色を呈す。8世紀後半であろう。39は土師器の鉢である。復元口径31cmを測る。底部から口縁部にかけて大きく開き、碗状を呈す。外面と口縁部内面にハケメを、胴部内面にはケズリを施す。外面は暗褐色を呈し、すすぐ付着する。内面は黄褐色を呈す。胎土には金雲母を含む。8世紀頃か。40は須恵器の壺である。胴部最大径18cmを測る。頸部から胴部は鋭く屈曲する。底面は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデを施す。やや青みを帯びた灰色を呈し、自然釉がかかる。41も須恵器の壺である。短頸壺か。胴部最大径は30cmである。底部はややふくらみ、胴部と底部の境目にやや高めの高台がつく。底部は回転ヘラケズリ、外面は回転ナデ、内面はナデで調整される。やや崩みを帯びた青灰色を呈す。40、41ともに8世紀であろう。

SK27出土遺物 弥生土器が出土している。42は壺の底部である。平底に近いがやや外側にふくらむ。底径9.6cmを測る。ナデで調整される。外面は淡赤褐色、内面は黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。弥生時代後期であろう。

SK43出土遺物 43は移動式壺の破片である。炊き口の鉢が残る。残長14cmである。断面はやや湾曲した細長い三角形を呈す。指押さえで成形し、ナデで仕上げる。赤白色を呈し、滑石、金雲母を胎土に含む。

SK49出土遺物 44は土師器の坏である。復元口径18cmを測る。胴部と底部の境目に断面逆台形の高台がつく。内外面ともにヘラミガキで仕上げる。外面は明赤褐色、内面は明黄褐色を呈す。胎土には金雲母を含む。8世紀前半頃か。45は土師器の壺である。復元口径30cmを測る。やや厚めに仕上げた口縁部に器壁が直に続く。外面胴部と口縁部内面はハケメ、胴部内面はヘラケズリが施される。明



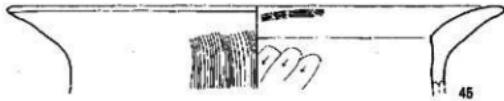
第13図 遺構出土遺物実測図1 (1/3)



43



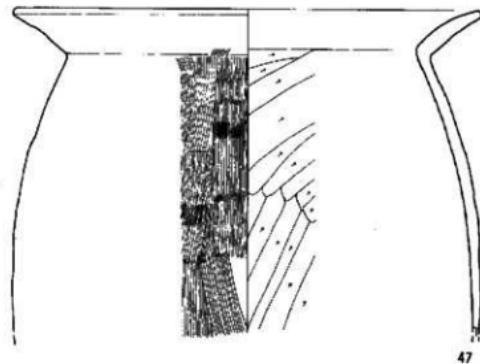
44



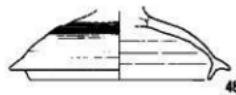
45



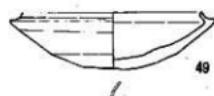
46



47



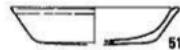
48



49



50



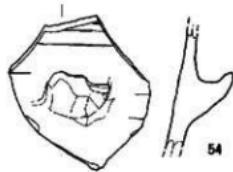
51



53



52

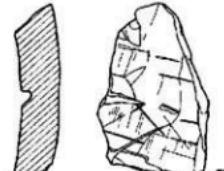


54

0 10cm



55



0 5cm

第14図 遺構出土遺物実測図 2 (1/3, 1/2)

赤褐色を呈し、胎土には金雲母、カクセン石を含む。8世紀か。

SK52出土遺物 46は土師器の壺と思われる。復元口径12cmである。器壁表面はなめらかな作りで、赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。器壁内面に、縦に数条の暗文が施される。

SK61出土遺物 47は土師器の壺である。復元口径28cmを測る。口縁部から頸部にかけてく字状に屈曲する。胸部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリを施す。口縁部はナデで仕上げる。外面は灰黄褐色、内面は茶褐～灰褐色を呈す。胎土には金雲母を含む。48は須恵器の蓋である。復元口径11cmを測る。かえりがつき、天井部はカキ日、体部は回転ナデを施す。青灰色を呈す。7世紀前半か。

SK73出土遺物 55は滑石製石錠未製品である。全長7cm、幅5cm、厚さ1.5cmを測る。おそらく滑石製石錠を転用して作られたものであろう。中央に貫通していない孔を穿ち、その横にひもを縛るために溝状条痕が刻まれている。

SK117出土遺物 49は須恵器の壺である。口径10.8cmを測る。口縁部にかえりがつき、底部にはヘラ記号が刻まれる。底部付近は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデで仕上げる。青灰～灰褐色を呈す。7世紀前半頃か。

SK127出土遺物 53は十師器の壺である。口径16.4cmを測る。底部の若干内側に断面逆台形の低い高台がつく。底部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデで仕上げる。黄白色を呈す。8世紀前半頃か。

SK160出土遺物 50は須恵器の提瓶の口縁部である。口径12cmを測る。内外面とも回転ヘラケズリを施す。明赤褐色を呈し、金雲母を含む。6世紀頃であろうか。

SK198出土遺物 51は土師器の小皿である。復元口径10cmを測る。底部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデで仕上げる。淡黄褐色を呈し、金雲母を少量含む。52は内黒十器である。復元口径16.4cmを測る。底部付近は回転ヘラケズリ、その他の部分はナデで仕上げられる。外面は淡赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。10世紀頃か。

SK226出土遺物 54は須恵器の壺の把手部分である。青灰色を呈す。

SK238出土遺物 56は内黒十器である。底径6cmを測る。底部にやや高めの高台がつく。器壁の一部の内外面にさびた鉄が付着している。底部は回転ヘラケズリ、内面はナデで仕上げられる。外面は明赤褐色を呈す。胎土に金雲母を含む。10世紀代であろう。57は土師器の壺の口縁部である。ややゆるく外反する。ナデで仕上げられる。明赤褐色を呈し、胎土に金雲母を少量含む。

SK240出土遺物 58は土師器の壺である。底部にやや高めで断面が細長い三角形の高台がつく。底径7.5cmを測る。ナデ調整を施される。底部は黒褐色で他は暗黄褐色を呈す。胎土に金雲母を含む。10世紀代か。59は土師器の壺の口縁部である。ややく字状に外反する。ナデで仕上げられる。灰黄褐色を呈し、胎土には金雲母を含む。60は土師器の壺である。底部にやや高めでハ字状に開く高台がつく。口縁部はやや丸みをもって作られる。復元口径15cmである。ナデで仕上げられる。外面は淡黄褐色、内面は黄白色を呈す。10世紀代。

SK307出土遺物 61は土師器の壺である。胴部と底部の境目に断面が細長い三角形状の高台がつく。口縁部は丸く仕上げられる。口径は13cmを測る。底部はやや丸みを帯びてふくらむ。ナデが施される。赤白色を呈し、胎土に金雲母を含む。高台が3／4欠損している以外はほぼ完形である。62は土師器の皿である。底部にハ字状に開く高台がつく。口径は12.2cmを測る。内外面ともに丁寧にナデで仕上げられる。赤白～赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。ほぼ完形である。61、62は造構の覆土上面から出土している。両者ともにほぼ完形でセットになると思われる。10世紀代。

SK345出土遺物 63は須恵器の壺である。底部はやや平坦に仕上げられる。底部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデで仕上げられる。口径12cmを測る。外面暗青灰色、内面は青灰色を呈す。7世紀前半。

**SK375出土遺物** 70は滑石製品である。長さ3cm、幅3.5cmである。半分欠損しているが、本来は断面が台形を呈す筒状であったと思われる。中央に孔が穿たれ、丁寧に研磨して仕上げられる。用途は不明である。

**SK394出土遺物** 71は石劍の転用品である。石劍の両端は欠損しているが、石劍中央と下方の両端に抉り込みが見られる。中央の抉り込み付近にはひもずれの痕跡が見られ、ひもで縛って何らかの用途をなしていたと考えられる。

**SK412出土遺物** 64は須恵器の壺の口縁部である。復元口径27cmを測る。口縁部は厚く作られる。外面はヘラミガキが施され、内面はナデで仕上げられる。外面は黒褐色、内面は灰褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。

**SK449出土遺物** 72は土製円盤である。径は3.5cm×3cmを測り、厚さ1.1cmである。黄褐色を呈す。土器の器底を削って作ったものであろう。

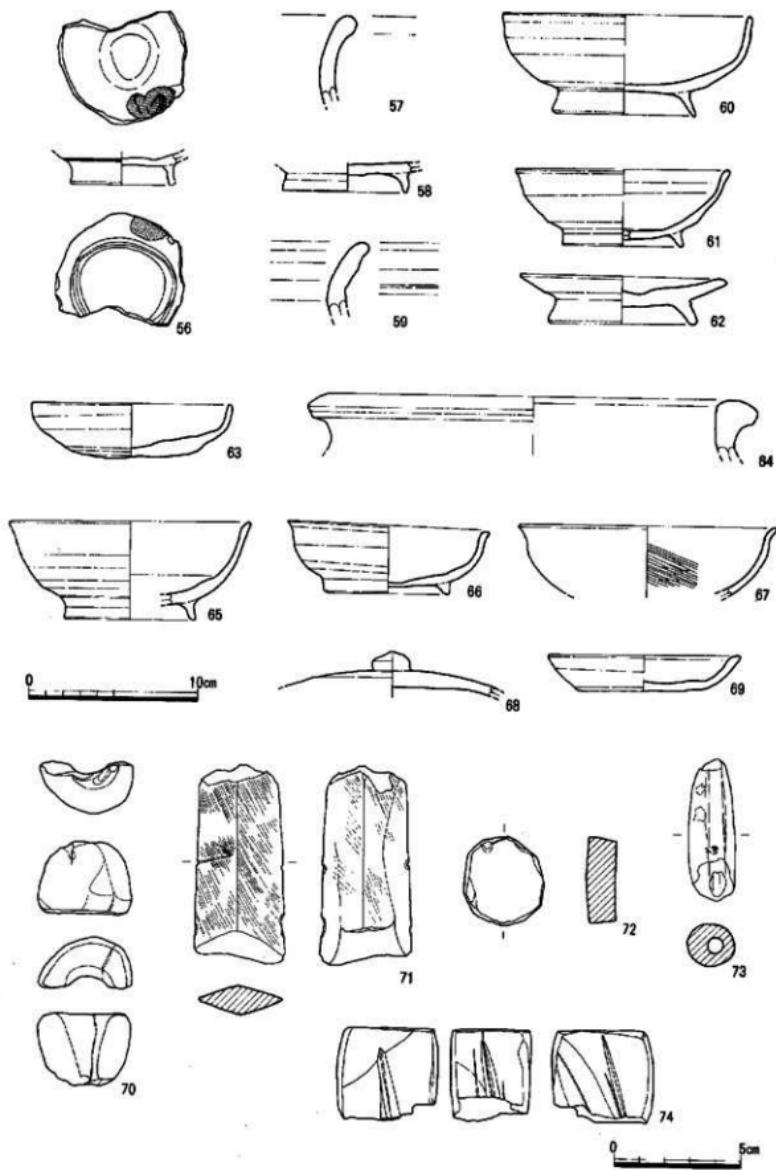
**SK463出土遺物** 74は砥石である。幅は3.5cm×2.5cmであるが、欠損しているため長さはわからない。3面に使用痕が見られる。

**SK605出土遺物** この遺構には石が大量に投棄されていたが、遺物もまとまって出土している。65、66は土師器の壺である。65は復元口径14.4cmを測る。胴部と底部の境目にやや高めの高台がつく。口縁部はやや外反する。底部付近は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデが施される。外面は淡黄褐色、内面は淡黃白色で内外面ともにすすぐが付着する。胎土に金雲母を含む。66は65に比較してやや短めの、断面三角形の高台がつく。口径は12cmを測る。口縁部はやや外反し、端部は平坦に仕上げられる。底部付近は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデが施される。淡赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。67は内黒上器である。口縁部は外反し、端部は丸みをもって作られる。復元口径15.4cmである。回転ナデが施され、内面はヘラミガキで仕上げられる。外面は黄褐色を呈す。胎土に金雲母を含む。65～67はいずれも10世紀代であろう。68は土師器の蓋である。疑似宝珠形のつまみがつく。天井部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施される。淡黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。69は土師器の小皿である。口径11.4cmを測る。底部は回転ヘラケズリが施され、板状圧痕が残る。その他の部分は回転ナデで仕上げられる。明黄白色を呈す。

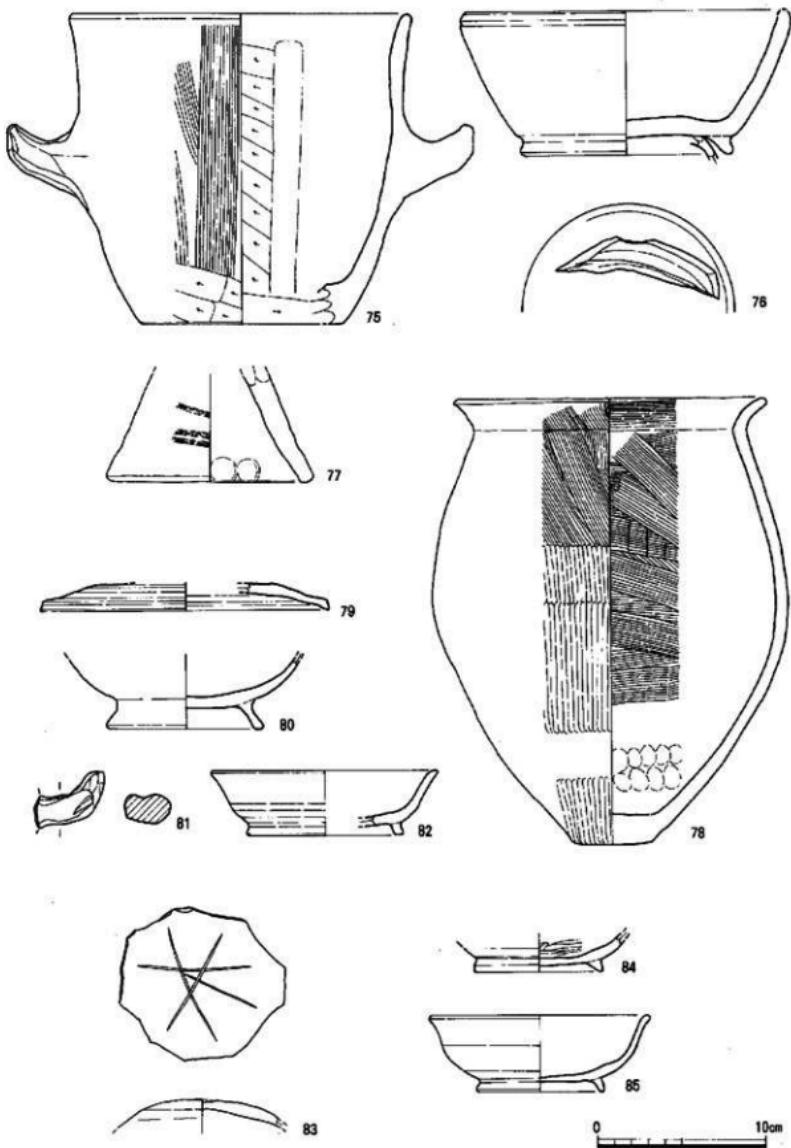
**SK629出土遺物** 73は土鍤である。残長5.6cm、最大幅2cmを測る。やや青みを帯びた灰褐色を呈す。

**SK644出土遺物** 二段掘りの土壙であったが、段落ちの面に遺物が投棄された状態で集中していた。一括遺物と考えて良いであろう。75は瓶である。復元口径21cmを測る。底部はおそらく棟が渡り、半円形の孔が二つ空く形となるであろう。棟の部分は欠損している。外面はハケメ、底部付近はヘラケズリで調整される。内面はヘラケズリで仕上げられる。口縁部のみナデ調整である。外面は淡赤白色、内面は淡赤褐色を呈し、両面ともにすすぐが付着する。胎土に金雲母を含む。76は須恵器の壺である。復元口径20cmを測る。底部の端に断面が細長い三角形を呈した高台がつく。底部には他の個体の破片が付着している。底部は回転ヘラケズリ、胴部の内外面は回転ナデで仕上げる。やや青みを帯びた灰褐色を呈す。8世紀前半頃であろうか。77は土師器の器台と思われる。復元底径12cmを測る。器壁は厚く、端部は平坦に仕上げられる。外面はハケメを施した後にナデ消し、端部はナデで仕上げる。内面は指押さえ而成形し、ナデで調整する。やや赤みを帯びた黄褐色を呈す。

**RP01** 78は押しつぶされた形で検出された土師器の壺である。ほぼ完形であった。口径19cm、器高27cmである。口縁部から頸部にかけてなだらかに屈曲し、底部は平底である。外面は頸部までハケメが、胴部から底部にかけて縱方向にミガキが施される。内面は底部付近までハケメが施され、底部は指押さえによる調整が見られる。赤褐色を呈し、外面にすすぐが付着する。胎土には金雲母を含む。



第15図 遺構出土遺物実測図3 (1/3, 1/2)



第16図 遺構出土遺物実測図 4 (1 / 3)

③ 井戸出土遺物（第16図79～82）

SE190出土遺物 SE190は井筒内を掘ることはできなかったが、堀方から遺物が出土している。79は須恵器の蓋である。復元口径17cmである。端部をつまみ出すように作り出す。外面上部は回転ヘラケズリ、外面は回転ナデで調整する。外面は淡赤褐色、内面は灰赤褐色を呈す。8世紀後半か。80は上師器の环である。底径9.5cmを測る。やや高めの高台がハの字形につく。胴部から底部にかけてならかに続く。底部は回転ヘラケズリ、外面は回転ナデが施される。淡黃褐色を呈し、金芸母を含む。10世紀代。81は土師器の瓶の把手である。長さ4.5cm、幅2.7cm、厚さ1.5cmを測る。淡赤白色を呈し、胎土に金芸母を含む。82は須恵器の环である。復元口径13.4cmを測る。底部の端に高台がつく。底部から胴部へはややならかに続き、口縁部はやや外反する。底部は回転ヘラケズリ、胴部の内外面は回転ナデが施される。灰白色を呈す。8世紀代。

④ 溝・河川出土遺物（第16図83～85）

SD343出土遺物 83は須恵器の蓋である。外面上部にヘラ記号が刻まれている。灰白色を呈す。7世紀前半頃であろう。

表3 遺構出土遺物観察表

被 国	出土地	種 別	材 性	寸 容	基 本	外 面 装 置	内 面 装 置	色 調	時 期
第16図79	SD190	土師器	移動式蓋	口径15cm	砂粒・金芸母含む	ナダ	ハケメ・ナダ	明赤褐色	8世紀
33	SD191	土師器	蓋	口径15.5cm	砂粒・金芸母含む	ナダ・タカナダ	ナダ	赤褐色	8世紀
34	SD192	土師器	蓋	口径14cm	砂粒含む	回転ナダ	回転ナダ	青灰色	8世紀
35	SD193	土師器	環	口径10cm	砂粒含む	回転ナダ	回転トア	赤紅・淡赤褐色	8世紀後半
36	SD194	須恵土器	瓶	口径15cm	砂粒・金芸母含む	ナダメ・ナダ	ナダメ	淡赤褐色	8世紀後半
37	SK46	須恵土器	環合	内径12.5cm 外径17.5cm	砂粒・金芸母含む	ナダメ・ナダ	ナダメ	淡赤褐色	8世紀後半
38	SK470	須恵器	蓋	口径16cm	滑溜	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡黄褐色	8世紀後半
39	SK470	土師器	手	口径15.5cm	滑溜	ナダ	ナダ	青褐色	8世紀後半
40	SK20	須恵器	蓋	口径12.5cm	滑溜	回転ヘラケズリ	回転ナダ	青褐色	8世紀
41	SK20	須恵器	手	口径14cm+α	滑溜	回転ナダ・回転ヘラケズリ	回転ナダ	赤・青褐色	8世紀
42	SK27	須恵器	手	口径16cm	砂粒・金芸母含む	ナダ	ナダ	淡赤・青褐色	8世紀後半
第16図79	SK473	土師器	移動式蓋	口径14cm	砂粒・金芸母含む	指揮ナダ・ナダ	ナダ	赤褐色	8世紀
44	SK474	土師器	手	口径14cm	滑溜	回転ヘラケズリ・ハラミガキ	ハラミガキ	淡赤・明黄褐色	8世紀前半
45	SK479	土師器	蓋	口径15.5cm	砂粒・金芸母・タクニン石合む	ナダメ・ナダ	ナダメ・ヘラケズリ	明黄褐色	8世紀
46	SK53	土師器	手	口径12cm	滑溜	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀
47	SK51	土師器	蓋	口径12cm	砂粒・金芸母含む	ナダメ・ナダ	ナダメ	淡褐色	8世紀後半
48	SK51	土師器	手	口径13cm	滑溜	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀
49	SK117	須恵器	手	口径14cm	滑溜	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	赤褐色	8世紀前半
50	SK160	須恵器	手	口径12cm	滑溜	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀前半
51	SK198	土師器	手	口径10cm	滑溜	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀
52	SK198	土師器	手	口径11.5cm	滑溜	回転ナダ・回転ヘラケズリ	回転ナダ	淡褐色	8世紀
53	SK127	土師器	手	口径16.5cm	砂粒含む	回転ナダ・回転ヘラケズリ	回転ナダ	淡褐色(外觀)	10世紀?
54	SK226	須恵器	手	口径13cm	滑溜含む	ナダ	ナダ	黃褐色	8世紀後半
55	SK73	滑石製造	石鍋	口径7cm	滑溜含む	ナダ	ナダ	青褐色	8世紀
第16図79	SD192	土器	手	口径6cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ	ナダ	明黄褐色(外觀)	10世紀
67	SK338	土器	蓋	口径10cm	砂粒・金芸母含む	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀前半
58	SK340	土師器	手	底径7.5cm	砂粒・金芸母含む	回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	10世紀
59	SK240	土師器	手	口径12cm	砂粒・金芸母含む	ナダ	ナダ	淡褐色	10世紀
60	SK240	土師器	手	口径12.5cm	砂粒・金芸母含む	ナダ	ナダ	淡褐色	10世紀
61	SK240	土師器	手	口径13cm	砂粒・金芸母含む	ナダ	ナダ	淡褐色	10世紀
62	SK247	土師器	手	口径12cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	10世紀
63	SK247	土師器	手	口径12cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	10世紀
64	SK472	須恵器	手	口径12.5cm	砂粒・金芸母含む	ミガキ	ミガキ	淡褐色	7世紀前半
65	SK405	土師器	手	口径11.5cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	10世紀
66	SK405	土師器	手	口径12cm	砂粒・金芸母含む	ミガキ	ミガキ	淡褐色	10世紀
67	SK405	土師器	手	口径13.5cm	砂粒・金芸母含む	ミガキ	ミガキ	淡褐色	10世紀
68	SK405	土師器	手	口径14cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ	回転ナダ	淡褐色(外觀)	10世紀?
69	SK405	土師器	手	口径11.5cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ	回転ナダ	淡褐色	10世紀後半
70	SD375	滑石製造	石鍋	3dm×3.5dm	滑溜含む	ナダ	ナダ	赤みがけた黃白色	8世紀
71	SK394	石器	石器の軋磨品	口径8cm	滑溜含む	ナダ	ナダ	——	——
72	SK440	土器	土器押置	5.5cm×3cm	砂粒含む	ナダ	ナダ	黄褐色	8世紀
73	SK429	土器	土器	口径6.5cm	滑溜	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀
74	SK463	石器	板石	3.5cm×2.5cm	滑溜	ナダ	ナダ	淡褐色	8世紀
第16図79	SK444	土器	手	口径10.5cm	砂粒・金芸母含む	ハケメ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	淡白色・淡褐色	8世紀代
75	SK444	土器	手	口径20cm	砂粒含む	ナダヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	青みがけた暗褐色	8世紀後半
76	SK444	土器	手	口径20cm	砂粒含む	ナダ	ナダ	赤みがけた暗褐色	8世紀後半
77	SK444	土器	手	口径19cm	砂粒含む	ナダ	ナダ	赤みがけた暗褐色	8世紀後半
78	HJ191	土器	手	口径19cm	砂粒・金芸母含む	ミガキ・ミガキ	ナダ・指揮ナダ	赤みがけた暗褐色	8世紀
79	SD199	滑石	手	口径17cm	砂粒含む	回転ヘラケズリ	回転ナダ	淡褐色	8世紀後半
80	SD199	土器	手	直径19.5cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	8世紀後半
81	SD199	土器	手	直径4.5cm	砂粒・金芸母含む	ミガキ	ミガキ・ナダ	淡褐色	8世紀
82	SD199	土器	手	口径13.4cm	滑溜	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	8世紀
83	SD343	須恵器	蓋	砂粒含む	回転ヘラケズリ	回転ナダ	回転ナダ	淡白色	7世紀前半
84	SD411	東西土器	手	底径8cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ・回転ナダ	ミガキ・ナダ	淡褐色	10世紀
85	SD411	土器	手	口径12cm	砂粒・金芸母含む	回転ヘラケズリ・回転ナダ	回転ナダ	淡褐色	10世紀

SD411出土遺物 84は両黒土器である。底径8cmを測る。断面三角形の高台が胴部と底部の境目につく。底部は回転ヘラケズリ、胴部外面は回転ナデを施す。内面はミガキの後ナデで仕上げている。胎土に金雲母を含む。85は土師器の坏である。復元口径13cmを測る。胴部と底部の境目に高台がハの字形につく。口縁部は外反し、端部はやや丸みをもって作られる。底部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデと横ナデで仕上げられる。淡黄褐色を呈し、金雲母を含む。両者ともに10世紀代であろう。

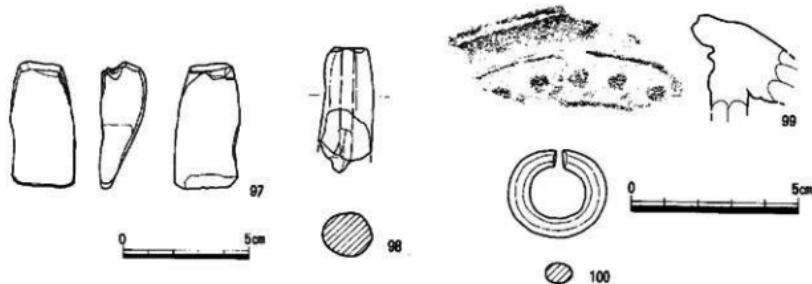
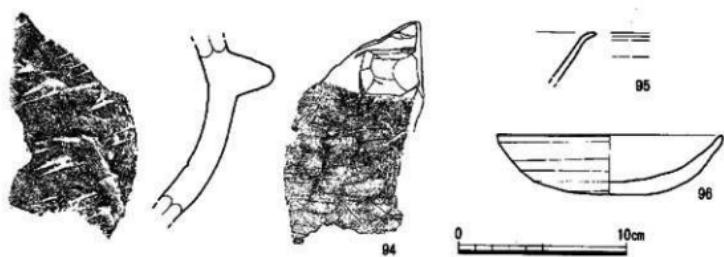
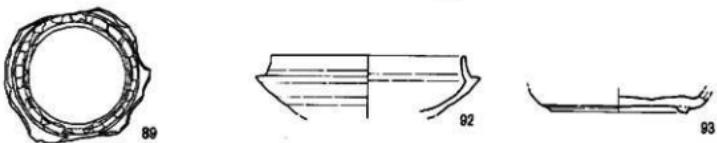
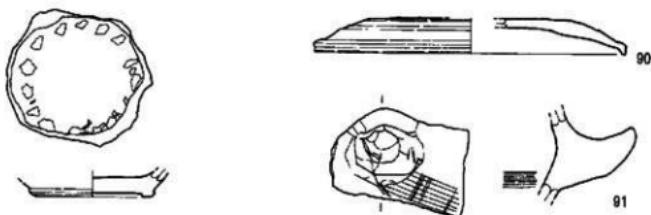
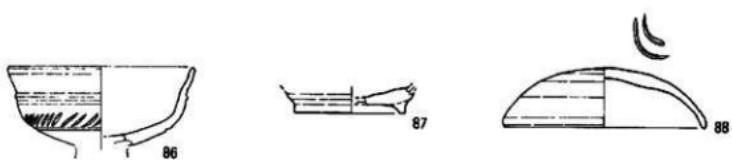
#### (1) 撥乱出土遺物 (第17図)

本調査区は前述のように現代までの撥乱が多く、破壊されている遺構も多かった。そのためか、撥乱中に中世以前の遺物が多く含まれていた。ここではそれらの遺物の説明を行う。

86は須恵器の高坏坏部である。口径11cmを測る。胴部中央の突帯と下部の沈線との間に斜行沈線を巡らせている。坏部底部は回転ヘラケズリ、胴部外面は回転ナデを施す。外面灰褐色、内面暗青灰色を呈す。6世紀。87は須恵器の坏である。底径6.6cmを測る。底部から胴部に変換する境目に断面逆台形の高台がつく。底部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施される。灰褐色を呈す。88は須恵器の蓋である。復元口径12cmを測る。天井部にヘラ記号らしい刻み目が入る。天井部は回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデを施す。青灰色～灰褐色を呈す。7世紀初頭頃か。89は越州窯系青磁碗の底部である。底径7.5cmを測る。内外面ともに目跡が残る。両面ともにやや明るめのオリーブ色の釉薬がかけられる。胎土は精良で金雲母が含まれる。90は須恵器の蓋である。復元口径18.4cmを測る。端部をつまみ出すように作り出す。天井部は回転ヘラケズリ、内外面は回転ナデと横ナデで仕上げられる。灰褐色を呈す。8世紀代。91は瓶の把手である。長さ4cm、幅4.5cm、厚さ2.3cmを測る。内外面はナデとハケメで調整されている。明赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。92は須恵器の坏である。復元口径11.5cmである。やや長めのかえりがつく。回転ナデで調整する。外面はやや青みを帯びた灰褐色、内面は灰赤褐色を呈す。7世紀初頭か。93は須恵器の坏の底部である。底径8cmを測る。断面逆台形の低い高台がつく。底部は回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデと横ナデで調整する。やや青みを帯びた灰褐色を呈す。94は滑石製石鍋の胴部である。把手がつく。内面は刃渡りの広いのみで成形され、外面は刃渡りの狭いのみで削りだし、調整される。95は越州窯系青磁碗の口縁部である。淡灰緑色を呈す。胎土は精良である。96は須恵器の坏である。口径13.4cmを測る。底部に回転ヘラケズリと板状圧痕が残る。淡灰褐色を呈す。7世紀前半か。97は携帯用の砥石である。長さ5cm、幅2.5cmを測る。断面は細長い三角形を呈す。厚みがある部分に穿孔されているが、貫通していない。未製品か。98は十鍾である。残長5cm、最大径2cmを測る。黄褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。99は軒丸瓦の破片である。二重の突帯の間に珠文が巡る。鴻臚館式であろう。灰褐色～黄褐色を呈す。胎土にカクセン石を含む。推定径は16cmである。100は耳環である。円に近い梢円形を呈し、長径3cm、短径2.7cmを測る。断面は梢円形を呈す。銅製である。

表4 撥乱出土遺物観察表

序 番	出土場 所	形 状	容 量	胎 土	外 面	特 徴	内 面	施 工	時 代
317-85	撥乱	須恵器	底付	口径11cm	砂粒含む	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	6世紀
87	撥乱	須恵器	环	底径6.6cm	砂粒・金雲母含む	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰褐色	
88	撥乱	須恵器	环	底径12cm	砂粒含む	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	青灰～灰褐色	7世紀初期
89	撥乱	須恵器系青磁碗	底付	口径7.5cm	砂粒・金雲母含む	砂粒	砂粒	オリーブ色	
90	撥乱	須恵器	手	口径18.4cm	砂粒含む	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	8世紀
91	撥乱	土器	底付	口径4cm	砂粒4kg	砂粒・金雲母含む	ナデ	ナデ・ハケメ	明赤褐色
92	撥乱	須恵器	环	口径11.5cm	砂粒	砂粒	砂粒	砂粒	7世紀初期
93	撥乱	須恵器	环	口径6cm	砂粒	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	青み帶びた灰褐色	
94	撥乱	滑石製	心臓			のみ刃渡り	のみ刃渡り		
95	撥乱	青磁碗	碗			砂粒	砂粒	淡灰褐色	
96	撥乱	須恵器	环	口径13.4cm	砂粒含む	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色	7世紀前半
97	撥乱	石器	环	口径5cm	砂粒・金雲母含む				
98	撥乱	土器類	土罐	残長5cm	砂粒・金雲母含む			黄褐色	
99	撥乱	瓦	軒丸瓦	径16cm	砂粒・カクセン石含む			灰～青褐色	
100	撥乱	金銀製品	耳環	径3cm×2.7cm					古墳時代



第17図 損乱出土遺物実測図 (1/3, 1/2, 2/3)

### 3. 小 結

以上簡単ではあるが、本調査地点の概要を述べた。以下に現時点で判明したことをまとめてみたい。今回は、地山面である黄白色粗砂層とその上面に堆積していた包含層となる黄褐色砂層を調査の対象とした。検出された遺物・遺構は弥生時代から現代にまで至る。近世から現代を除くと、弥生時代から中世初頭までが、本調査地点において人々の生活が営まれていた時代の中心となろう。

遺物を中心に概観してみる。包含層からは弥生時代後期から12世紀に至る遺物が出土した。特に弥生時代後期と7世紀から8世紀にかけての時期が多い。当該期のものとしては、前者では複合口縁壺・鉢、後者では土師器の高杯・壺・皿、須恵器の高杯・蓋・すり鉢等がある。やや時期の下るものとして、高台付きの土師器の皿、越州窯系青磁碗、白磁碗等が出土している。その他、瓶、土錘がある。

遺構出土の遺物を見てみると、8世紀から10世紀にかけての時期が圧倒的に多い。須恵器よりも土師器の方が量が多く、須恵器は高台のつくものである。当該期のものとして、土師器の壺・鉢・杯・皿・蓋、須恵器の壺・蓋・杯・壺、黒色土器等が出土している。また断定はできないが当該期と思われる時期の移動式竈の鉢部の破片が2片出土している。その他、滑石製石鏡を転用して作られた石錘や纺錘とも考えられる滑石製品、弥生時代石劍の転用品なども検出された。

本調査地点は激しく搅乱されていたが、搅乱中に多くの遺物が混入された状態で検出された。6世紀から8世紀に至る須恵器の壺・杯・高杯、土師器の壺の他、軒丸瓦、越州窯系青磁碗、滑石製石鍋、古墳時代の耳環等、中世にまで至る時期の遺物が出土しており、本調査地点の性格を物語っている。

遺構については、ピットと性格不明の土壤以外に井戸と溝、河川が検出された他は住居・墓地等は確認し得なかった。あるいは土壤の中にその可能性があるかもしれないが、今回の調査ではその断定は困難であった。以上のように広範囲の時期の遺物が混合されている状況では、一つの遺物をもって遺構の時期を断定するのは不可能である。しかしある程度まとめて遺物が出土している遺構について整理してみる。SK6は弥生時代の壺と壺が出土しており弥生時代後期とされる。SK20は土師器の鉢と須恵器の壺から見て8世紀代であろう。SK49は土師器の壺と杯から8世紀前半頃か。SK240は土師器の杯から、SK307は土師器の杯と皿から、SK605は土器の蓋杯と内黒土器から、SE190は最も新しい時期の遺物からいはずれも10世紀として良いのではないか。溝と河川については、出土遺物量が少ないので、切り合っている遺構による遺物の混入が考えられるので明確な時期は断定し得ない。以上から、確實に弥生時代後期、8世紀、10世紀の遺構が存在しているといえよう。かつ、他の遺構出土遺物から検討しても弥生時代後期、7世紀から10世紀までの時期が遺構として確認されたとしてさしつかえないと考える。さらに包含層や搅乱中の、数少ないながらも白磁碗や滑石製石鍋の出土から中世初頭まで生活が営まれていたと考えて良いだろう。ただ、古墳時代は明確な遺構として押さえられなかった。

以上のことから、本調査地点では、第4・5次調査地点と同様、奈良から平安時代を中心とした時期に生活が営まれたこと、かつ、移動式竈、越州窯系青磁、軒丸瓦等の出土から公的施設が存在した可能性が指摘される。また、弥生時代まで遺構の上限がさかのほり、これらの調査地点を含む範囲では弥生時代から集落が形成始めたことも新たに推定された。しかしながら、堅粕遺跡群の性格を解明するにはさらなる資料の積み重ねが必要である。今後の調査に期待したい。



1. 調査区全景（東から）



2. 調査区北部（東から）



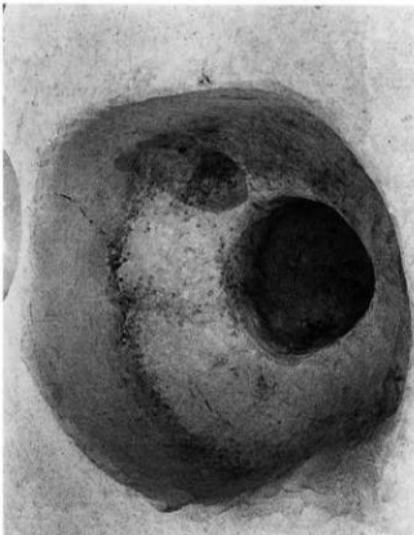
1. 調査区南部・SD343、SD411（北東から）



2. 調査区東部（北から）



2. SK605 (南から)



4. SK644元掘状況 (南東から)



1. SK307 (南から)



3. SK644遺物出土状況 (南東から)



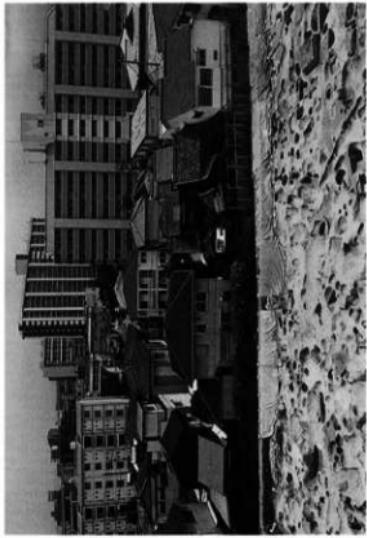
2. SE190(西から)



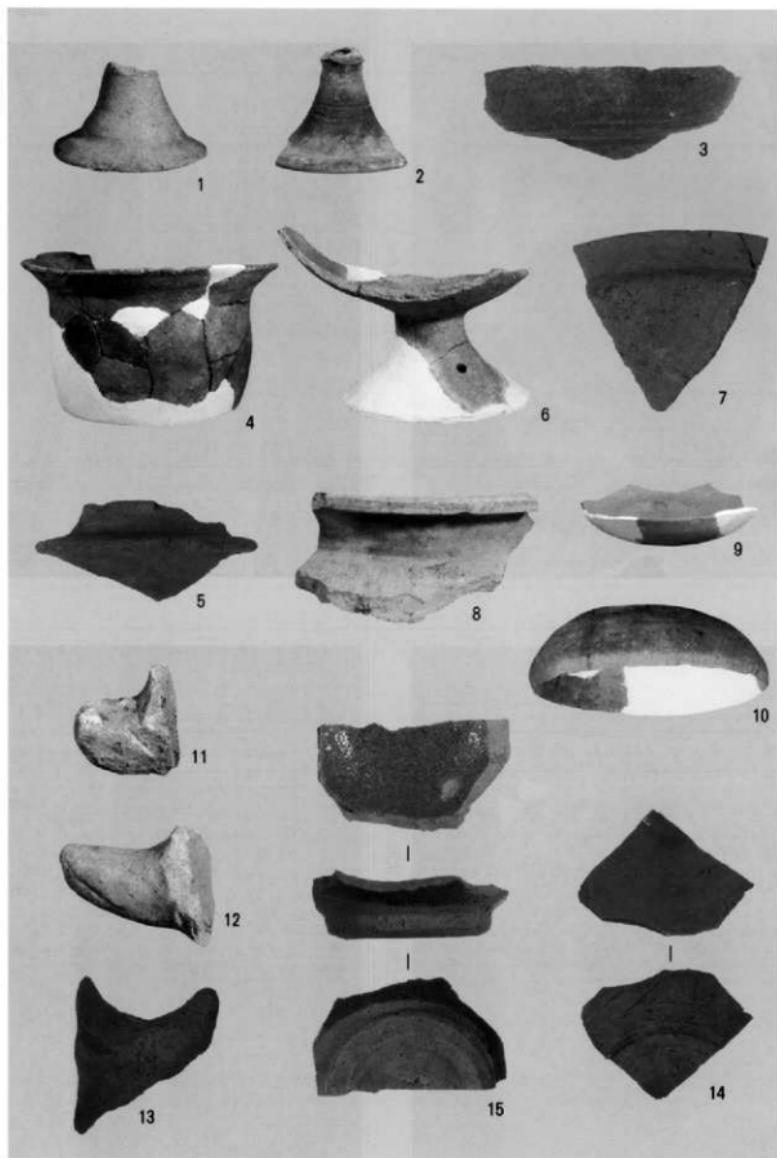
4. 作業風景



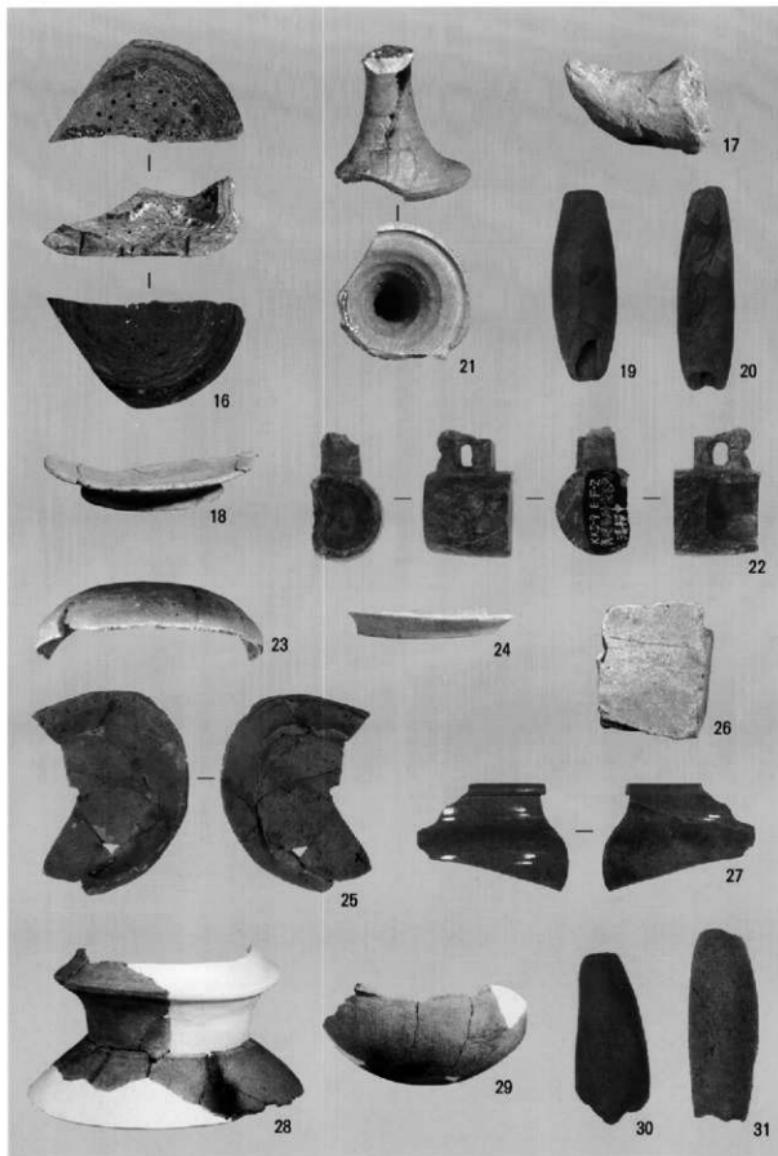
1. RPP1土師器壺出土状況(北東から)



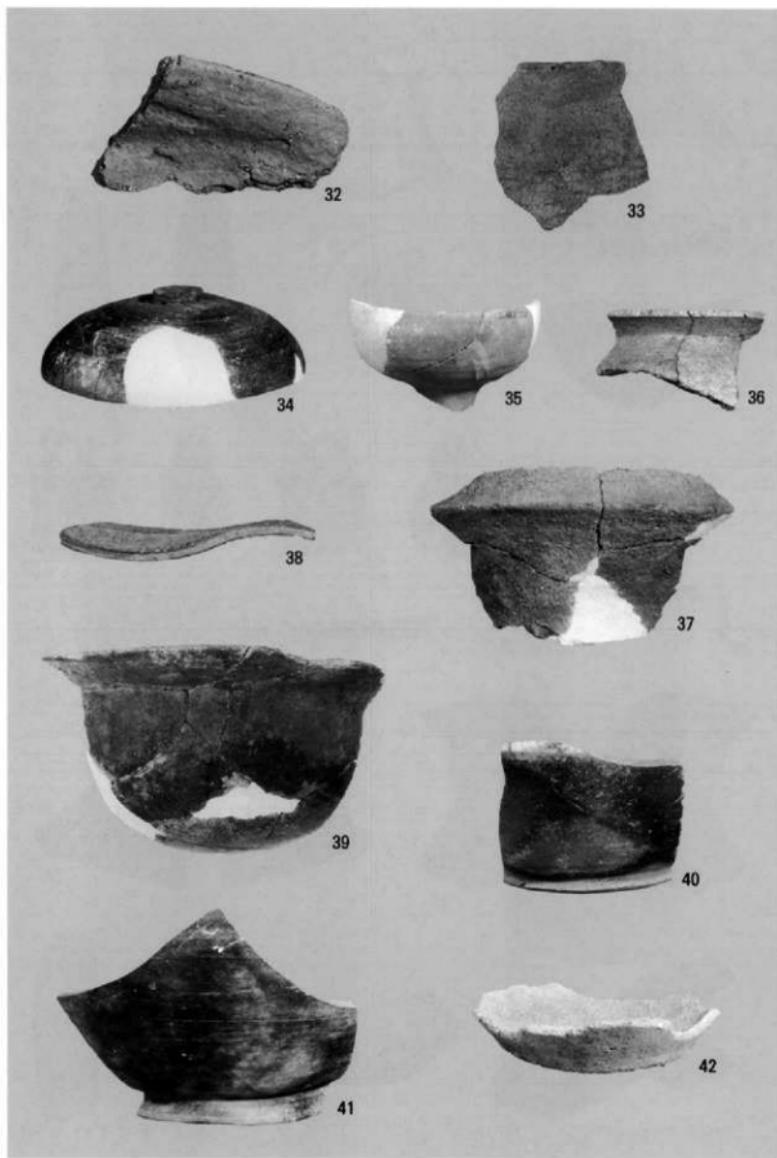
3. 調査区から第4・5次調査地点を望む



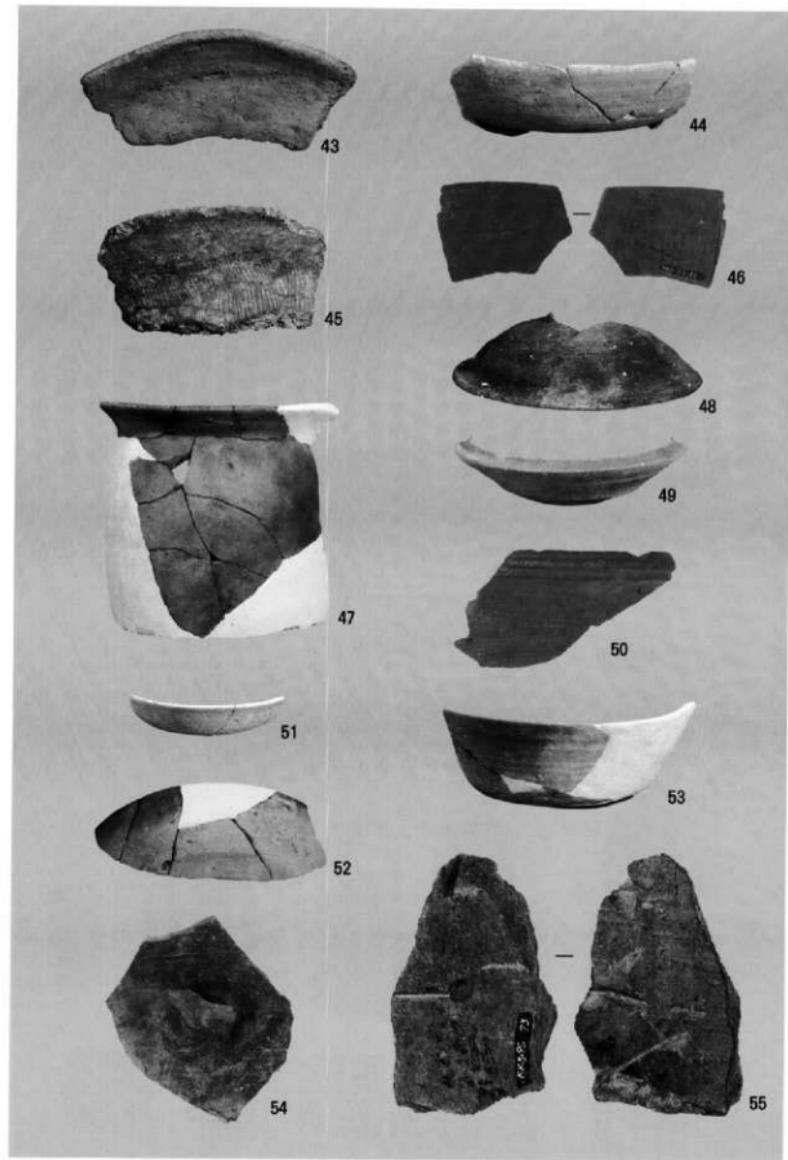
出土遺物 1 (包含層出土遺物 1)



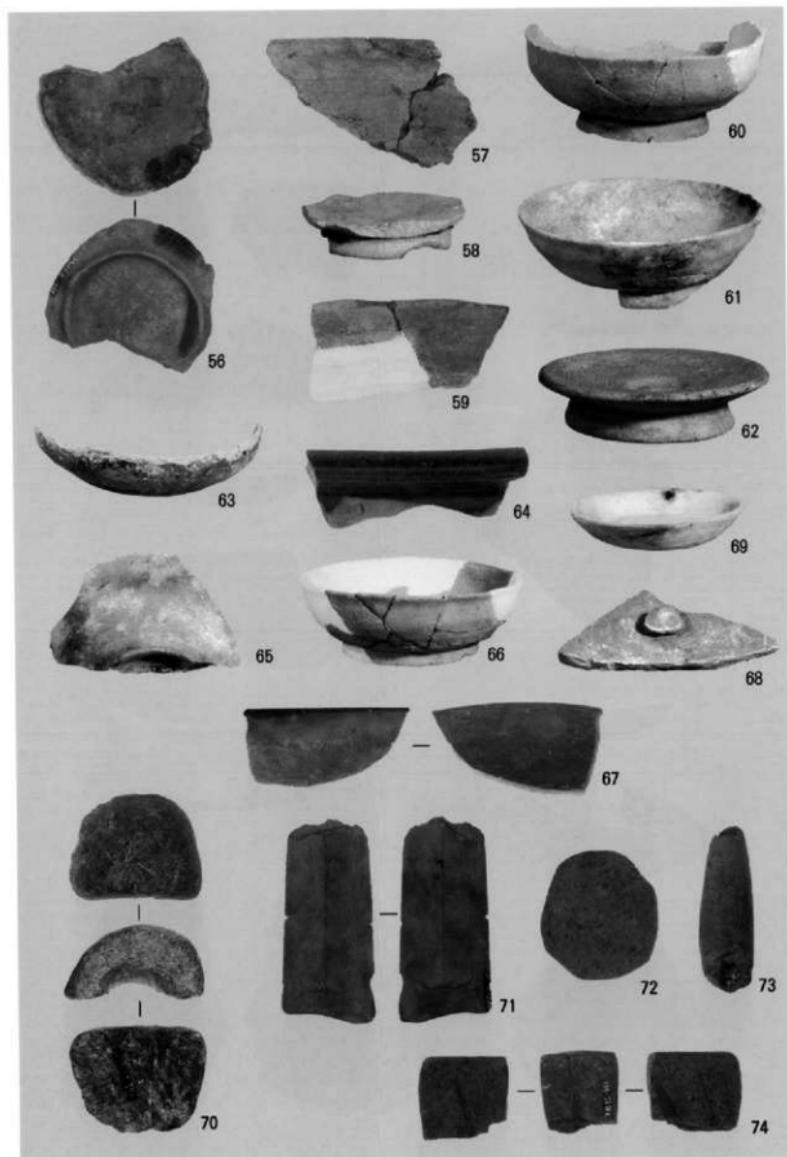
出土遺物 2 (包含層出土遺物 2)



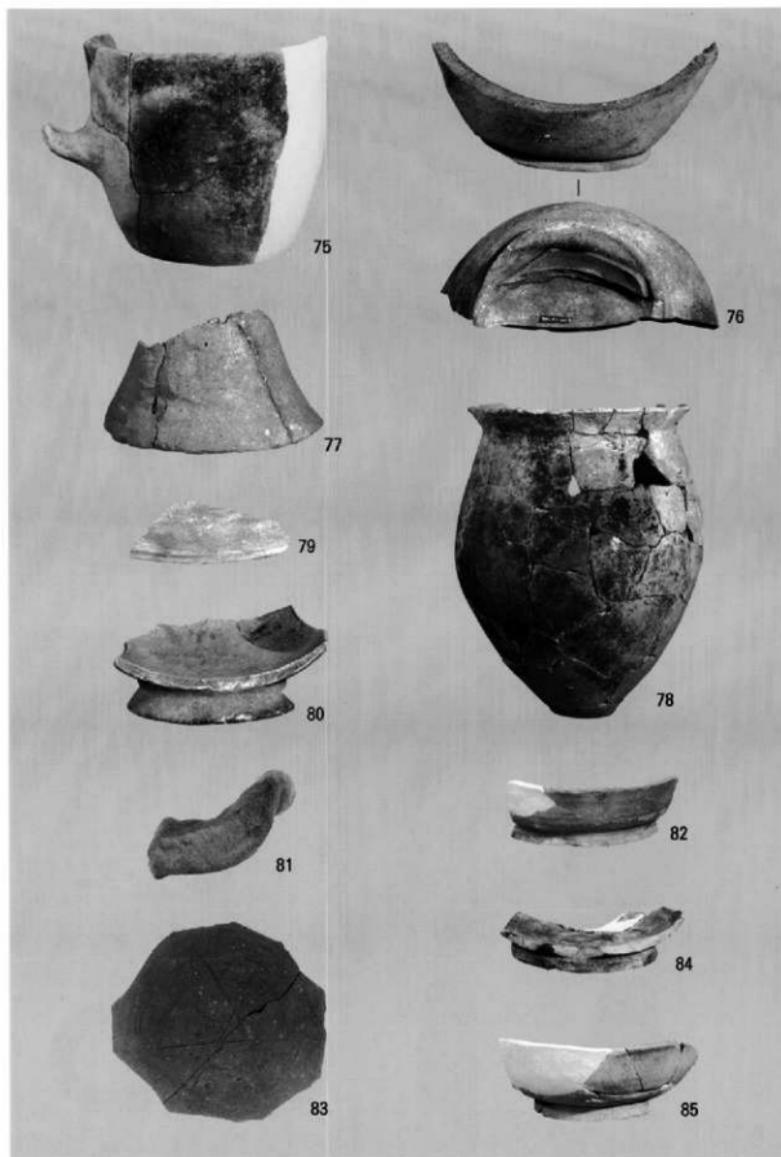
出土遺物 3 (遺構出土遺物 1)



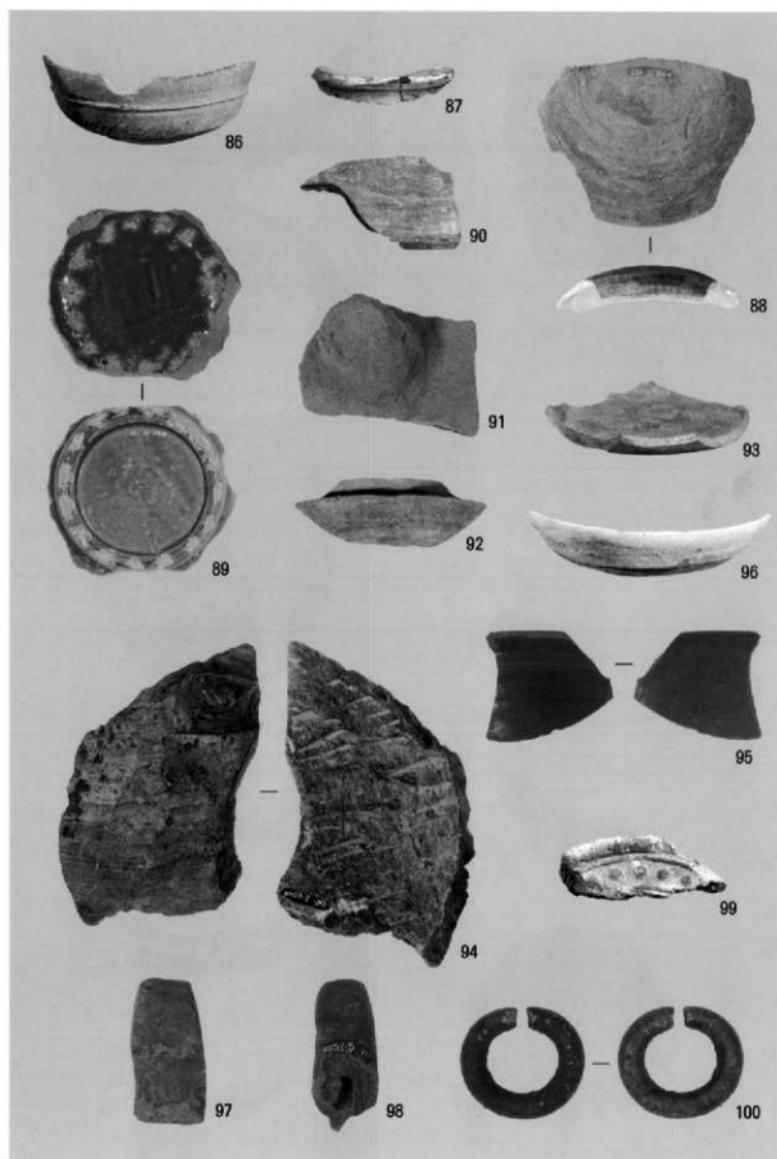
出土遺物 4 (遺構出土遺物 2)



出土遺物 5 (造構出土遺物 3)



出土遺物6（造構出土遺物4）



出土遗物 7 (扰乱出土遗物)

---

かた  
堅 粕 4

—堅粕遺跡群第9次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第626集

2000年(平成12年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
(092) 711-4667

印刷 秀巧社印刷株式会社  
福岡市南区向野2-13-29  
(092) 541-5661

---

堅  
柏  
4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第626集

2000

福岡市教育委員会

